

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 7-6

部活動と社会体育

目次

要約	2
はじめに	4
1. 部活動と社会体育の現状	5
●ここでいう部活動・社会体育とは	5
●4割の子どもが部活動に参加	6
●野球王国を支える社会体育	9
●部活動か社会体育に入っている子は6割	12
●部活動は朝練習、社会体育は休日練習	13
2. 部活動や社会体育に入っている子どもたち	17
●意外にも努力志向型の子どもたち	17
●スポーツは高校くらいまで	21
●部活動・社会体育に入って良かったこと・悪かったこと	22
●レギュラーの子・補欠の子	24
3. 部活動や社会体育に入っていない子どもたち	30
●めんどくさいから入らない	30
●両親のスポーツぎらいが子どもに影響する	33
●中学生になったら入ってみようかな	34
●部活動・社会体育に入っている子は大変そうだけれどもうらやましい	35
おわりに	38
子ども研究ノート⑥ 友だち	深谷昌志 40
資料1 調査票見本	44
資料2 学年・性別集計表	55

調査レポート／部活動と社会体育

要約



① 4割の子どもが部活動に参加

部活動には41%の子どもが入部しており、サッカー、ミニバスケットボール、陸上といったスポーツの人気が高い。入部についての性差をみると、女子に比べて男子のほうが15%くらい高くなっている。また、入部した時期は4年・5年といった高学年が多い(図2～図4)。



② 社会体育で人気の高いソフトや野球

社会体育に参加している子どもは32%と、部活動に比べておよそ10%低い。人気の高いスポーツは、ソフトボール(30%)、野球(23%)、ミニバスケットボール(19%)となっており、部活動で人気のあったサッカーや陸上を上まわっている。また、社会体育の場合は、1～3年の低学年のうちから参加する子どもが目立つ(図7～図9)。



③ 部活動は朝練習、社会体育は休日練習

部活動は朝練習(73%)が中心で、それを補うかたちで放課後の練習(38%)が行われている。これに対して、社会体育は日曜日の練習(68%)や夏休みの練習(55%)などの休日の練習が中心である(図12、図14)。

練習時間は、部活動はさほど長くないが、休日にまとめて練習する社会体育では、「日曜日に3時間以上の練習をする」と答えた数値が59%にも達した(表1、表2)。

調査概要

1. 調査主題 部活動と社会体育
2. 調査視点 小学生の部活動と社会体育の実態を調べる。また、部活動や社会体育に入っている子とそうでない子で、どんな違いがあるのか調べる。

3. 調査項目 どんな部活動や社会体育があるか/いつ、何時間くらい練習しているか/部活動・社会体育に入った理由/いつまでスポーツを続けるか/部活動・社会体育に入らない理由/部活動・社会体育に入っている子はどんな子か

放送大学教授 深谷昌志

千葉市立平山小学校教諭 広森 滋

④ スポーツは高校くらいまで

子どもたちに、今、部活動や社会体育でしているスポーツをこれから先も続けていくか、とたずねたところ、データから、スポーツは高校までという結果が読みとれた。この傾向は、男子よりも女子に強くみられた(図19、図20)。



⑤ レギュラーの子

補欠の子どもに比べて、レギュラーの子どもは部活動や社会体育に入ったことがプラスに働いている。例えば「負けすぎらいになった」とか、「礼儀正しくなった」とか、「友だちができた」などといった項目についてである。

反面、「けが」や「きびしい練習」「先生にしかられる」などのマイナス面も高い。それでもレギュラーの子どもには、学校ばかりでなく社会にでてからもスポーツを続けていこうという子どもが多い(図24～図27)。



⑥ 入部者に対する気持ち

部活動・社会体育に入っていない子は、入っている子のことをうらやましく思っている。特に、「一生懸命打ち込めるものがある」(49%)と考えている(図34)。しかし、「遊び時間がなくなる」(39%)し、「めんどくさい」(32%)から、自分では、入ろうとはしない(図28)。



4. 調査時期 昭和62年1月～2月
5. 調査対象 千葉県の小学4・5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	209	196	405
5年	334	256	590
6年	246	278	524
計	789	730	1,519

①はじめに①

最近、日本のスポーツ界はやや低迷ぎみである。相次ぐナショナルチームの敗戦で、スポーツ指導のあり方が、あちらこちらで問われている。ある者は、ナショナルチームを強くするためには、底辺の拡大が必要であると説く。またある者は、アマチュアリズムの限界を唱え、勝つためには、ある程度のプロ化が必要であると説く。なかには東欧諸国のように、国家が音頭をとってスポーツ・エリートを養成する必要があると説くものさえある。

ところが、あたかもスポーツ立国を思わせるこれらの声とは、全く相反する声が、もう一方にある。それは、小・中学生のスポーツのいきすぎを問う声である。小・中学生のスポーツ事故が起こるたびに、指導者のやりすぎが批判される。

一方では、小学生からのスポーツ・エリートの必要性が論じられ、もう一方では、小学生のスポーツのいきすぎが叫ばれている。こういった矛盾する社会状況の中で、第一線の指導にあっているのが、学校のスポーツ部の顧問であり、社会体育の指導員である。体

育大出身の人をのぞけば、その多くは、スポーツ教育のしろうとである。もちろん、スポーツ経験をもつ人は多いであろう。しかし、スポーツをどういった考えに基づき、どのように指導すればよいかという専門的な教育をうけてきた指導者は少ない。事故のたびに、指導者を批判するのは簡単である。だが、こういった現状を考えれば、スポーツの事故はなくなるだろうし、ひいては、日本のナショナルチームも強くなるであろう。今、一番必要なことは、スポーツ教育に対する社会全体としてのコンセンサスを確立することである。言い換えれば、現場のひとりひとりの指導者に任せきりのスポーツ教育を、欧米諸国のように社会の責任において行う体制にすることである。

そのためには、第一歩として、部活動・社会体育の現状を明らかにしなくてはならない。本号では、その一助になればという願いを込めて、部活動・社会体育の実態を子どもの目を通してレポートする。

1. 部活動と社会体育の現状



ここでいう部活動・社会体育とは

小学生の部活動と社会体育の現状を明らかにするにあたって、ここではどのような活動を部活動や社会体育と呼ぶのか、ある程度の定義づけが必要であろう。この両者とも、小学生を対象としたスポーツ活動である。しかし、この両者の組織には、あいまいな面がある。例えば、学校施設を利用して、教師が指導している場合でも、組織としては社会体育になっているような場合である。むしろ、子どもには、このような違いは区別することができない。そこで、子どもの目を通してレポートする以上、わかりやすい区分けが必要となってくる。本調査では、学校で行われているスポーツの課外活動を「部活動」とし、学校以外(地域)で行われているスポーツの活動を「社会体育」とした。

ここで、部活動には、スポーツ以外の部活動(例えば、音楽部など)や正課としてのクラブ活動が、あやまって含まれてくる可能性がある。そこで、これらのものが含まれないように、アンケートの選択肢をつくる際に十分に配慮したつもりである。また、社会体育については、純粋にボランティアで行われている活動以外に、地域にある商業スポーツ活動が含まれてくる可能性がある。ここで、考えてみれば、欧米に比べて貧弱な社会体育の活動を補完しているのは、スイミング・スクールのような商業スポーツ活動である。これらの商業スポーツ活動も、広い意味では「社会体育」に含まれるのではないかと思ひ、あえてアンケートの選択肢の中から除くことはしなかった。

4割の子どもが部活動に参加

図1は、それぞれの学校にはどのような部活動があるのかをたずねた結果である（ただし地域、学校によって盛んなスポーツに差があり、本調査は残念ながら全国調査ではないので、この図1に関しては全国のすう勢を反映しているとは限らない。図1は、調査校群の属性程度に考えていただきたい）。

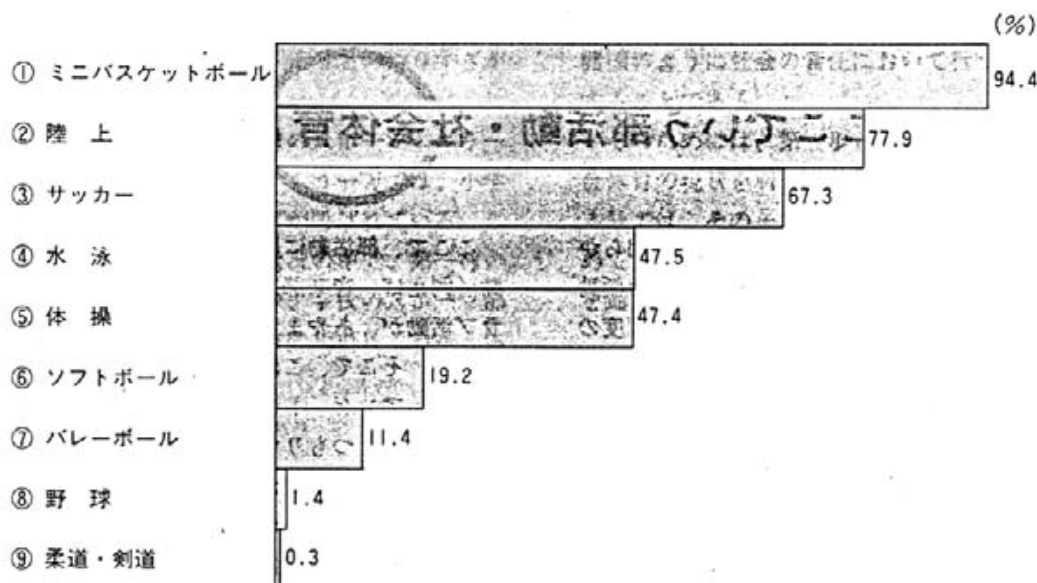
図からわかるように、ミニバスケットボール、陸上、サッカー、水泳、体操といったところが、小学校の部活動の主だったものといえる。ただし、現在のバレーボール人気を考えると、これにバレーボールを加えてもよい

であろう。

図2は、子どもたちが、これらの部活動に、どのくらい入部しているかをみたものである。まず、全体集計をみると、41%の子どもが入部していることがわかる。調査対象が4年生からということ考えると、これは予想以上に高い数値である。次に、各部活動ごとの入部状況を見てみよう。サッカー、ミニバスケットボール、陸上といった部活動の人気が高いようである。

さらに図3は、図2の性差をみたものである。上の2つの図が、男子全体と女子全体の

図1 学校にある部活動(スポーツ部)



入部状況を示しており、下の表が、各部活動ごとの性差を示している。これらの図表から、部活動への入部は、女子より男子のほうが約15%高いことが読みとれる。また、男子はサッカー部への入部が、女子はミニバスケットボール部への入部がずば抜けて高いことがわかる。女子の場合、調査地区以外の学校では、ミニバスケットボールの代わりにバレーボールが盛んなところもあるようである。しかし、男子の場合は、サッカーがほぼ小学校を代表する部活動といってもよいであろう。

では、子どもたちがこれらの部活動に入部したのは何年生からなのだろうか。図4は、入部した時期を表している。一見してわかるように、4年生が最も高く、次いで5年生となっている。これは各学校が、部活動の募集

対象を高学年にしばっているためと考えられる。

最後に、それぞれの部にどのくらいの子どもたちが入部しているのかをみたものが図5である。「20～30人くらい」という数値が55%と最も高くなっているが、「50人以上」というマンモス部活動も23%とかなりある。高校や大学ならいざしらず、自己管理のできない小学生を50人以上も集めて行う部活動の指導が、かなり大変で危険なものであることは、容易に想像がつく。指導者としても、自分の目のとどく20～30人くらいに部員数をしほりたいところであろうが、すべての子どもを平等にという公教育の理念がある以上、ある程度の事故の危険は覚悟の上でやらざるをえないのであろう。

図2 部活動(スポーツ部)への入部

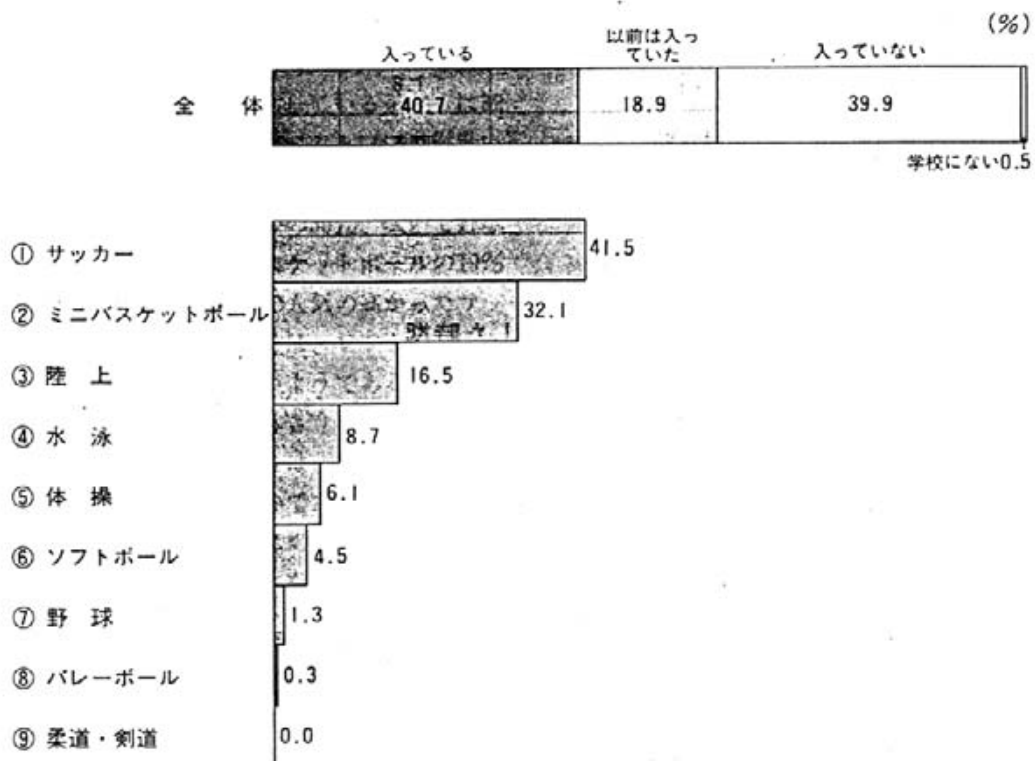
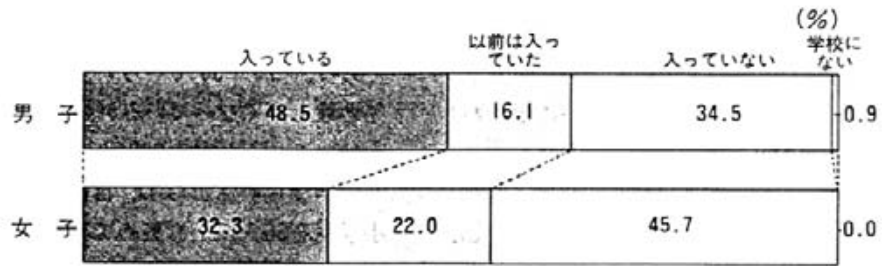


図3 部活動への入部(性別)



(%)

	男子	女子
サッカー	65.5	1.7
ミニバスケットボール	9.3	70.0
陸上	16.1	17.2
水泳	7.3	11.2
体操	4.9	8.2
ソフトボール	7.0	0.4
野球	1.8	0.4
バレーボール	0.5	0.0
柔道・剣道	0.0	0.0

図4 入部した時期

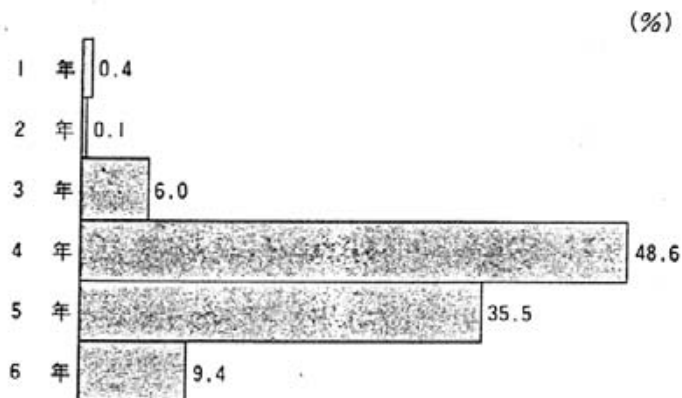


図5 部活動の人数



野球王国を支える社会体育

図6は、地域にどんな社会体育の組織があるかをみたものである。野球、ソフトボール、サッカー、ミニバスケットボールといったスポーツが高い数値を示している。これらのスポーツは、リトルリーグに代表されるような、ボランティアの指導者を中心とした、営利を目的としないスポーツクラブによって行われている。

では、これらの社会体育にどのくらい子どもたちが参加しているのかをみたものが、図7である。全体として参加している子どもは32%と、学校の部活動に比べるとほぼ10%低い。スポーツ別にみても、最も人気の高いスポーツは、ソフトボールの30%、次いで野球の23%、3位にミニバスケットボールの19%となっている。部活動で人気の高かったサッカー(14%)と陸上(1%)は、ソフトボールと野球の前にやや影が薄いようである。

さらにこの傾向がはっきりしてくるのが、図8の結果である。図8は、社会体育への参加状況の性差をみたものであるが、全体の参加状況は、男子の44%に対して女子の19%と、女子が男子の半分以下になっている。この結

果から、社会体育の中心は男子ということができよう。その男子に人気が高いのがソフトボール(39%)と野球(31%)である。この両者を合わせると70%と、圧倒的な人気である。日本の男子スポーツ界では、優秀な選手がみんな野球に行ってしまうという話をときどき耳にする。そのよし悪しは別として、日本の野球王国の底辺を支えているのは、小学生の社会体育なのであろう。

さて、社会体育へ参加した時期(図9)だが、この結果も、部活動とはかなり異なっている。部活動では、高学年からの入部がほとんどであった。これに対して、社会体育では、1年生が19%、2年生が16%、3年生が31%と、低学年から参加する子どもが66%にも達している。

図10は、部活動同様に、社会体育に参加している子どもたちの数をみたものである。指導しやすい「20~30人くらい」が63%と最も高く、部活動に比べると、「50人以上」というのが10%と少ない。ほぼ適正規模を保っているといえよう。

図6 地区にある社会体育(スポーツチームやクラブ)

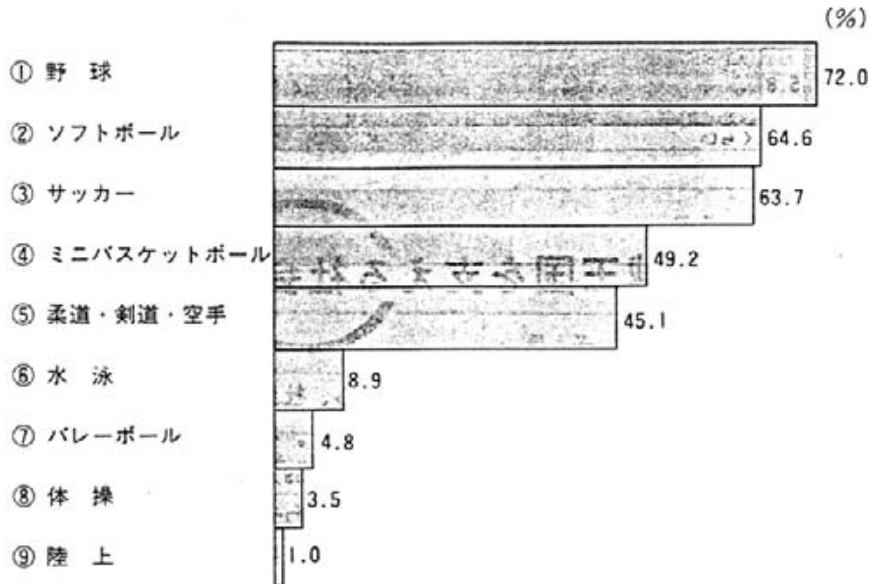


図7 社会体育(地区のスポーツ)への参加

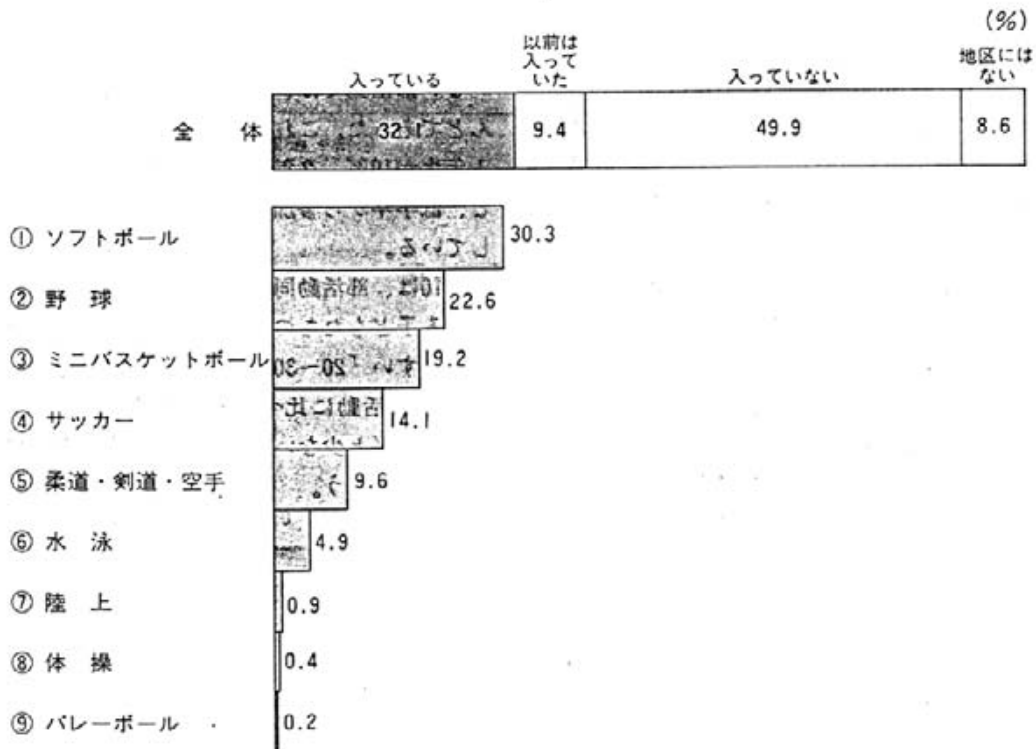
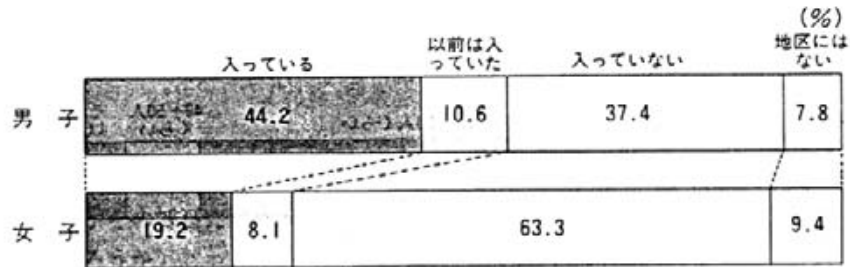


図8 社会体育への参加(性別)



(%)

	男子	女子
ソフトボール	39.0	6.5
野 球	30.5	0.8
ミニバスケットボール	0.9	70.2
サッカー	18.3	2.4
柔道・剣道・空手	11.3	4.8
水 泳	3.5	8.9
陸 上	0.9	0.8
体 操	0.0	1.6
バレーボール	0.0	0.8

図9 社会体育に参加した時期

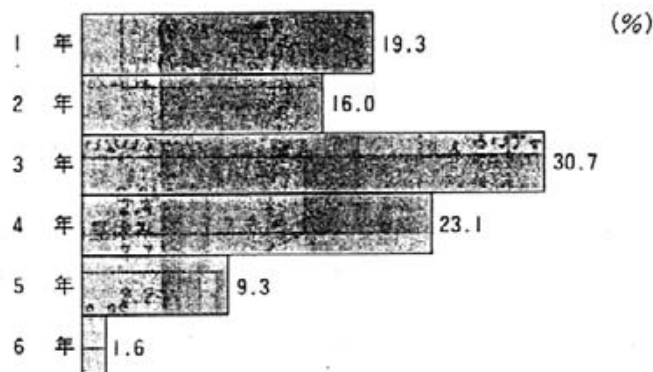


図10 社会体育(スポーツチームやクラブ)の人数

				(%)	
10人 くらい	20~30人くらい		40~50人 くらい	それ 以上	
16.7	62.9		9.9	9.9	
10人以下0.6					

部活動か社会体育に入っている子は6割

ここまで、部活動と社会体育のそれぞれについて、子どもたちの参加状況をみてきた。社会体育に比べると、部活動のほうがやや高い数値を示していた。では、部活動か社会体育のいずれかに入っている子どもはどのくらいいるのだろうか。その結果が図11の網かけをした部分である。全体としては、部活動か社

会体育のいずれかに入っている子どもはほぼ60%にも及ぶ。性差をみると、男子はさらに高く71%になる。これに対して、女子はやや低く45%である。とにかく、この数値をみる限り部活動・社会体育は、子どもたちの生活を考える上で欠かせない要素になっているといえよう。

図11 部活動・社会体育に入っている子・入っていない子

		(%)	
		部活動に 入っている	部活動に 入っていない
社会体育に 入っている	13.1 (男子 21.4) (女子 6.2)	19.0 (男子 22.8) (女子 13.0)	
社会体育に 入っていない	27.6 (男子 27.0) (女子 26.1)	40.3 (男子 28.8) (女子 54.7)	

		(%)	
		入っている	入っていない
全 体	59.7	40.3	
男 子	71.2	28.8	
女 子	45.3	54.7	

部活動は朝練習、社会体育は休日練習

部活動、社会体育といえ、何にもまして問題にされるのがその練習だが、実態はどうなっているのだろうか。

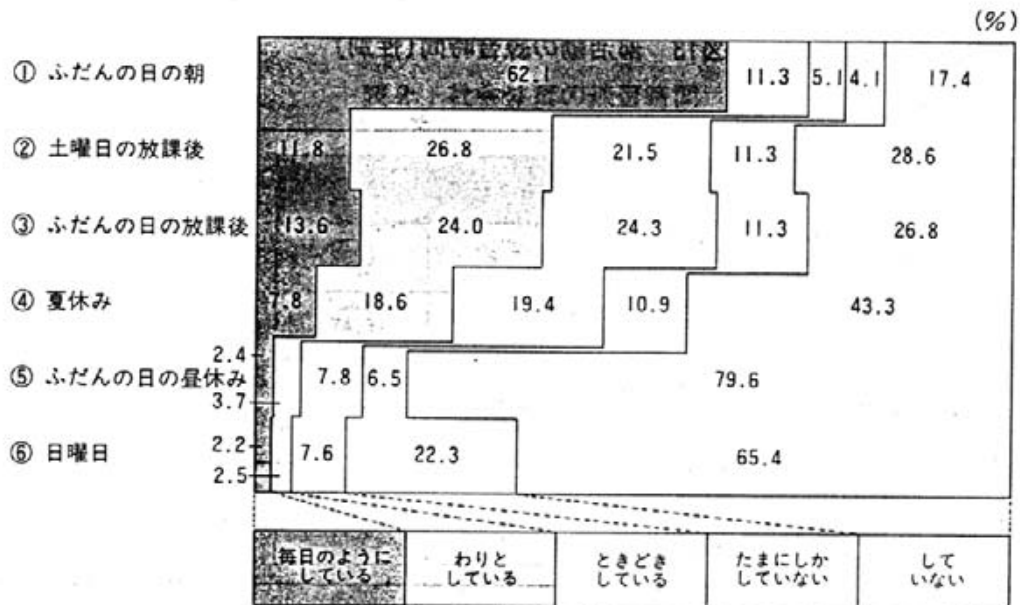
図12は、いつ部活動の練習をしているかをみた結果である。「ふだんの日の朝」は、「毎日のようにしている」と「わりとしている」を加えると73%と頭抜けている。その後、「土曜日の放課後」(39%)、「ふだんの日の放課後」(38%)がこれに次いでいる。部活動の場合、朝練習が中心で、それを補うかたちで放課後の練習が行われているようである。学校や教師を対象とした他の『モノグラフ・小学生ナウ』の調査でも明らかなことだが、学校の放課後は会議や研修、出張が多く指導者が練習を見る機会が少ないのであろう。

では、一番の関心事である練習時間はどうなっているのだろうか。表1はその結果を示

したものである。「ふだんの日の朝」以外は、「練習をしていない」が一番高い数値を示している。その「ふだんの日の朝」にしても、練習時間は「30分くらい」が60%と最も高くなっている。思った以上に練習時間は短いようである。ただし、「ふだんの日の放課後」に「2時間以上」の練習をするところが32%、「土曜日の放課後」に、「3時間以上」の練習をするところが29%と、数値こそさほど高くないが、練習時間が小学生にとっては長すぎるのではないかと思われる部活動もあるようである。結果として、全体としての練習時間はそう長くはないが、一部に過熱ぎみの学校もあるというところであろう。

さて、図13は表1の「部活動の練習時間」の性差をみたものである。項目は、「ふだんの日の朝1時間以上する」とか「土曜日の放課

図12 いつ練習や試合をしているか(部活動)



後3時間以上する」とかいった、練習のしすぎではないかという部分だけ抜き出してある。図をみるとわかるように、ほとんどの項目で女子のほうが男子を上まわっている。

「土曜日の放課後3時間以上する」にいたっては、男子の22%に対して、女子は2倍近い41%となっている。男子に比べて体力的

に劣る女子のほうが練習時間が長いというのは、やや問題であろう。

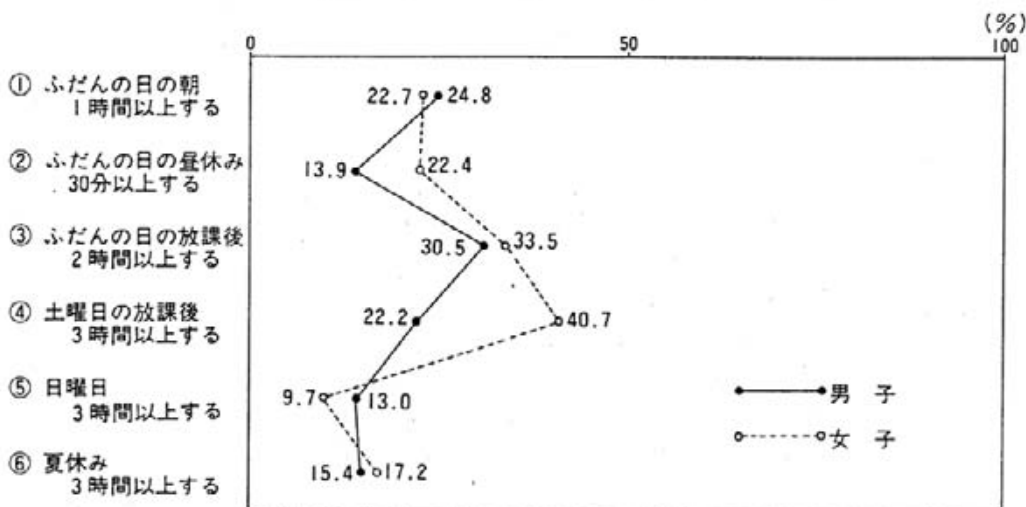
ここまで部活動の練習についてみてきたが、次に社会体育の練習についてみてみよう。図14は、社会体育の練習がいつ行われるかを示している。図が示すように「日曜日」「夏休み」「土曜日の放課後」といったところが高くな

表1 部活動の練習時間

	(%)				
	していない	30分くらい	1時間くらい	2時間くらい	3時間以上
① ふだんの日の朝	16.2	59.8	22.9	0.5	0.6
② ふだんの日の昼休み	82.9	15.6	0.8	0.2	0.5
③ ふだんの日の放課後	29.4	11.3	27.7	27.2	4.4
④ 土曜日の放課後	31.1	5.1	6.9	27.6	29.3
⑤ 日曜日	76.1	2.2	4.6	5.3	11.8
⑥ 夏休み	43.8	2.5	12.2	25.4	16.1

○ 一番高い数値 ○ 二番目に高い数値

図13 部活動の練習時間(性別)



っている。特に「日曜日」は「毎日のようにしている」と「わりとしている」を加えると、68%と7割近くになり、社会体育の練習は休みの日が中心と言える。むろん地域の指導者が、ボランティアで行っている活動が多いことを考えれば、納得のいくデータである。それにしても平日は自分の仕事をし、ほとんど

毎週の休日を社会体育のために働いたのでは、指導者も体を休める暇がなくて、大変であろう。

次に表2は、社会体育の練習時間をみたものである。ここで「日曜日」と「夏休み」の「3時間以上」の数値に目をむけたい。それぞれ59%、42%とかなり高い数値を示してい

図14 いつ練習や試合をしているか(社会体育)

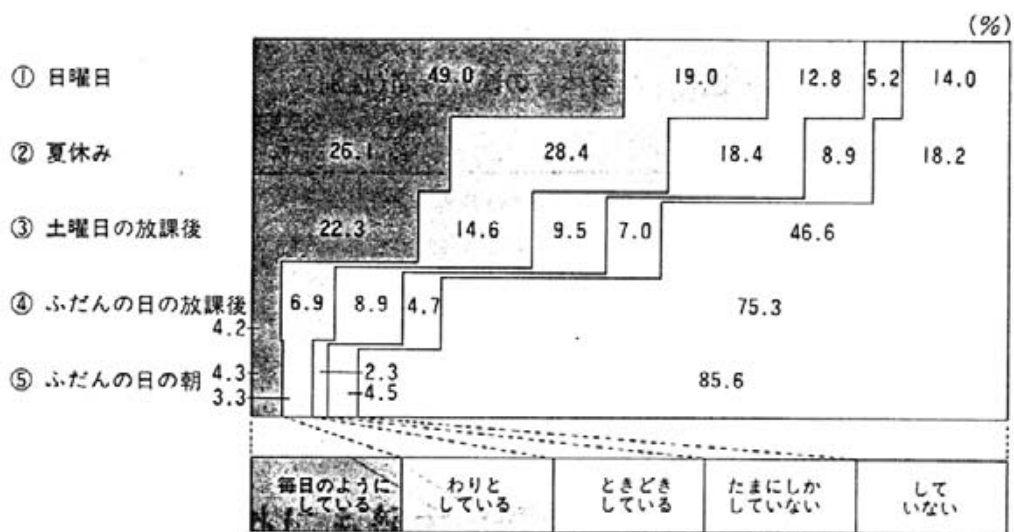


表2 社会体育の練習時間

	練習時間 (%)				
	していない	30分くらい	1時間くらい	2時間くらい	3時間以上
① ふだんの日の朝	86.9	6.7	3.5	1.2	1.7
② ふだんの日の放課後	74.3	3.7	12.2	8.3	1.5
③ 土曜日の放課後	47.0	2.3	7.9	17.2	25.6
④ 日曜日	13.9	2.1	6.0	19.5	58.5
⑤ 夏休み	17.8	4.1	11.8	24.4	41.9

○ 一番高い数値 ○ 二番目の高い数値

る。ふだんできない分を休日にまとめてしようという気持ちはわかるが、これでは練習のしすぎではないかという批判を受けても仕方がない。

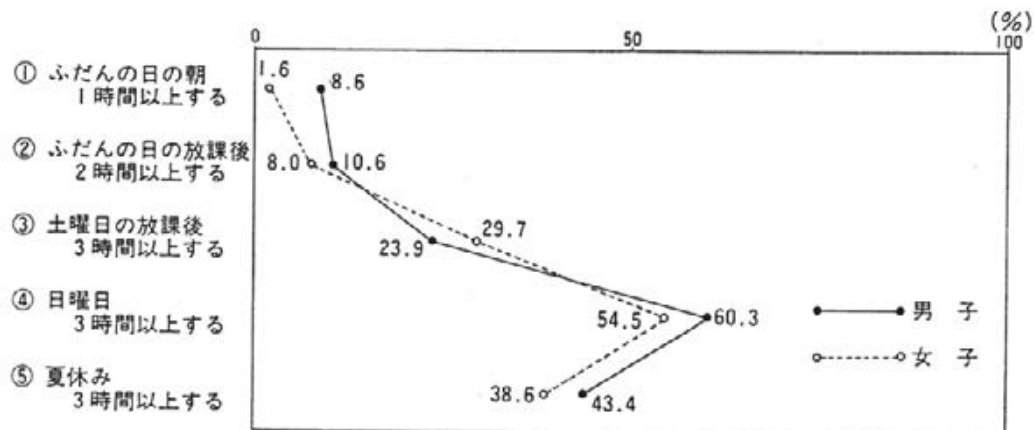
なお、図15は社会体育の練習時間について性差をみたものである。参考までに掲載する。

本章の最後にここまでレポートしてきたデータを簡単にまとめておこう。

部活動には約4割の子どもが、社会体育に

は約3割の子どもが参加している。どちらかに参加している子どもは約6割とかなり高い。人気があるスポーツは、部活動ではサッカー、ミニバスケットボール、社会体育では野球、ソフトボール、ミニバスケットボールといったところである。練習時間は、部活動はそう長くないが、社会体育は休日にまとめてするために、かなり長い。

図15 社会体育の練習時間(性別)



2. 部活動や社会体育に入っている子どもたち



意外にも努力志向型の子どもたち

第1章では、部活動や社会体育の現状について明らかにしてきたが、第2章では、その中にある子どもたちの姿にスポットをあててみることにする。なお、本章の調査対象は部活動・社会体育に入っている子どもたちである。

まず、子どもたちが部活動や社会体育に入った理由からさぐってみることにしよう。その結果を明らかにしたものが図16である。図は、「とてもあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えた数値の高い順に整理してある。上位には、「①体をきたえるため」の66%、「②おもしろそうだから」の60%、「③何か運動がしたくて」の51%が並んでいる。はじめ現代っ子の「軽さ志向」を考えると、「おもしろそうだから」とか「友だちにさそわれ

て」とか「かっこよさそうだから」といった軽い項目が上位を独占するのではないかと思っていた。ところが、「体をきたえる」とか「運動がしたい」といった『努力志向』的な項目が上位にきたので、予想がはずれてしまった。意外にも部活動や社会体育に参加する子どもには、『努力志向』が残っているのかもしれない。

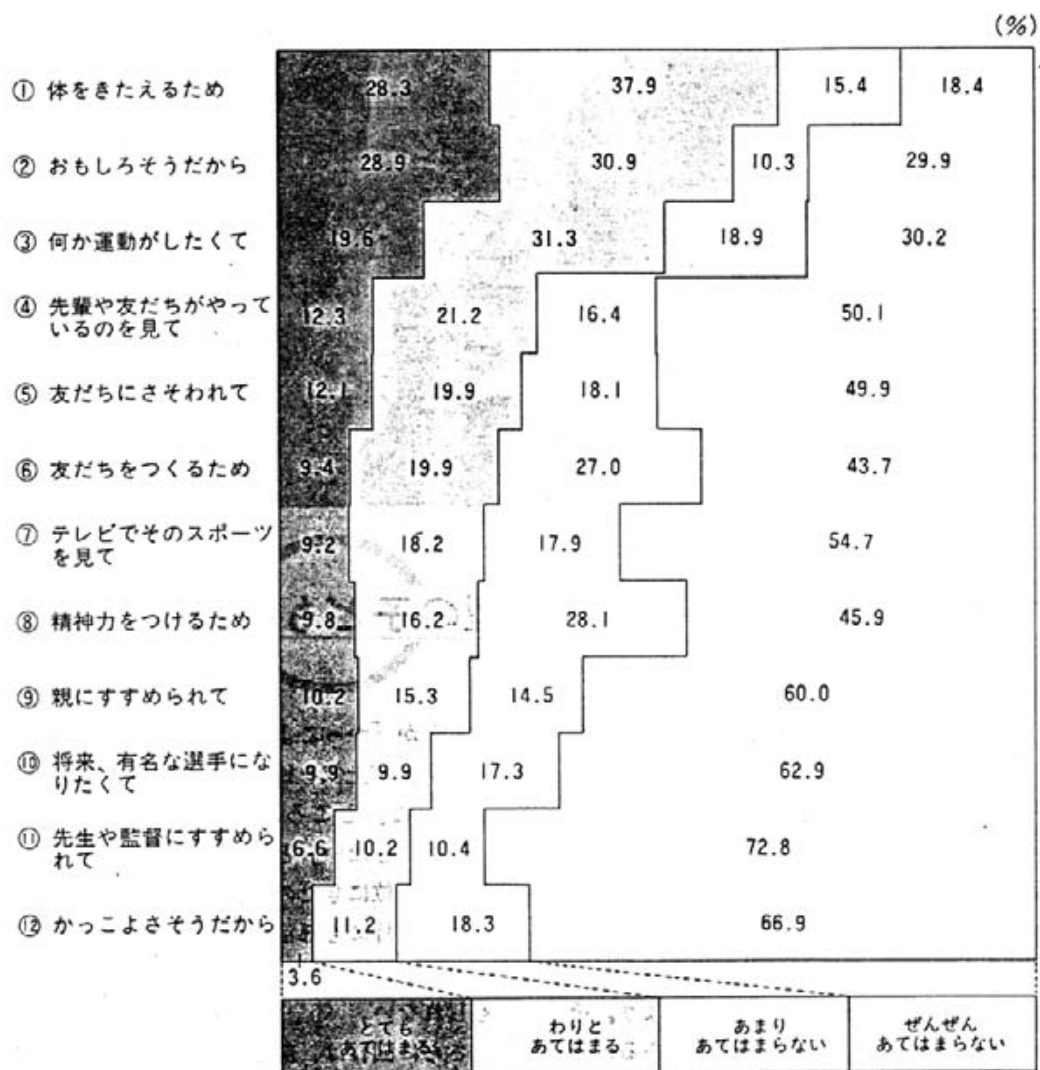
さらに図17は、部活動や社会体育に入った理由の性差をみたものである。この図でおもしろいのは、男子が女子より高い数値を示している項目である。それらは、「②おもしろそうだから」と「⑦テレビでそのスポーツを見て」と「⑩将来、有名な選手になりたくて」といった項目だ。これらの項目は、『軽さ志向』というよりも、昔ながらのヒーローへの

あこがれのように思える。20～30年前の男の子が王選手や長島選手をテレビで見て野球を始めたのと同じである。ひと昔前の構図が、現代の男の子にもそっくりあてはまるとは、

これまた思ってもいなかった。

図18は、部活動や社会体育を続けている理由についてみたものである。この図も「とてもあてはまる」と「わりとあてはまる」を加

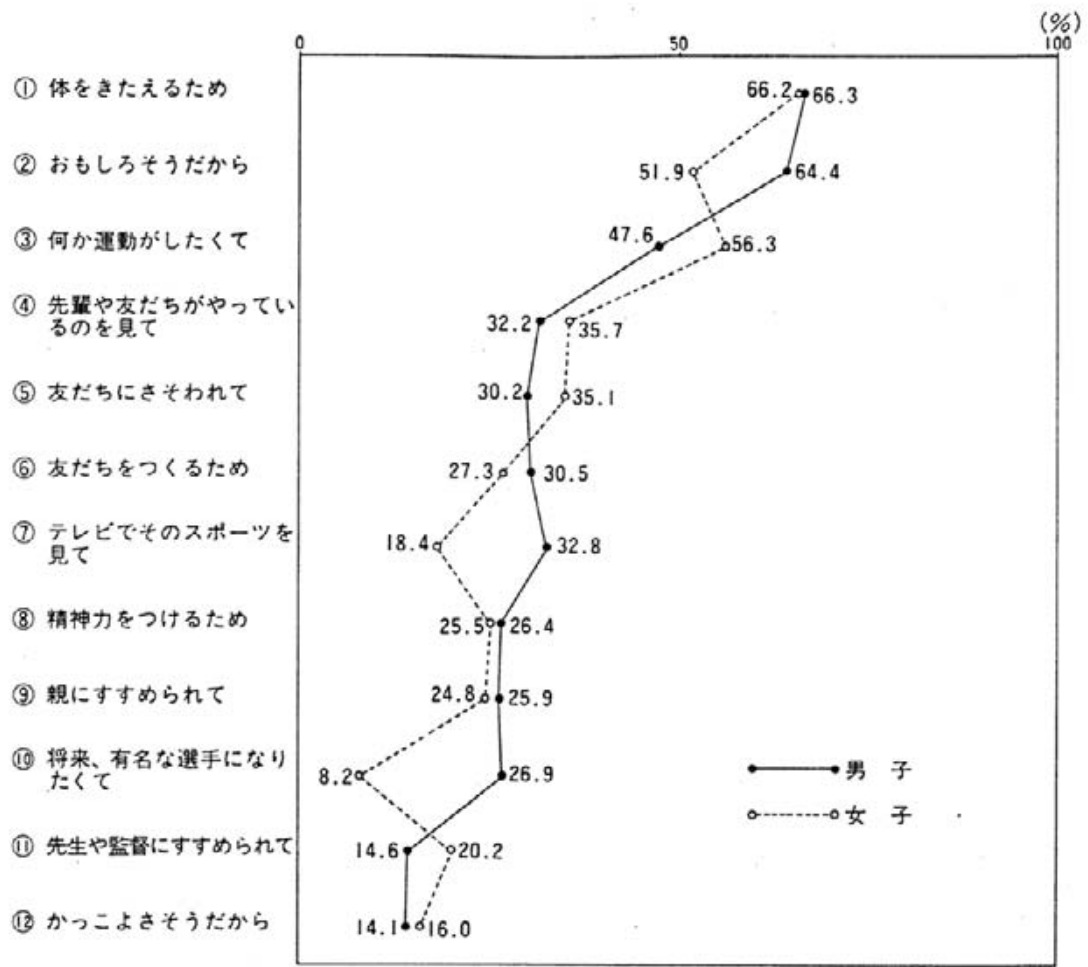
図16 部活動や社会体育に入った理由



えた数値の高い順に整理してある。上位には、「①このスポーツが好きだから」の80%、「②体がじょうぶになるから」の66%、「③だんだんうまくなったから」の64%と

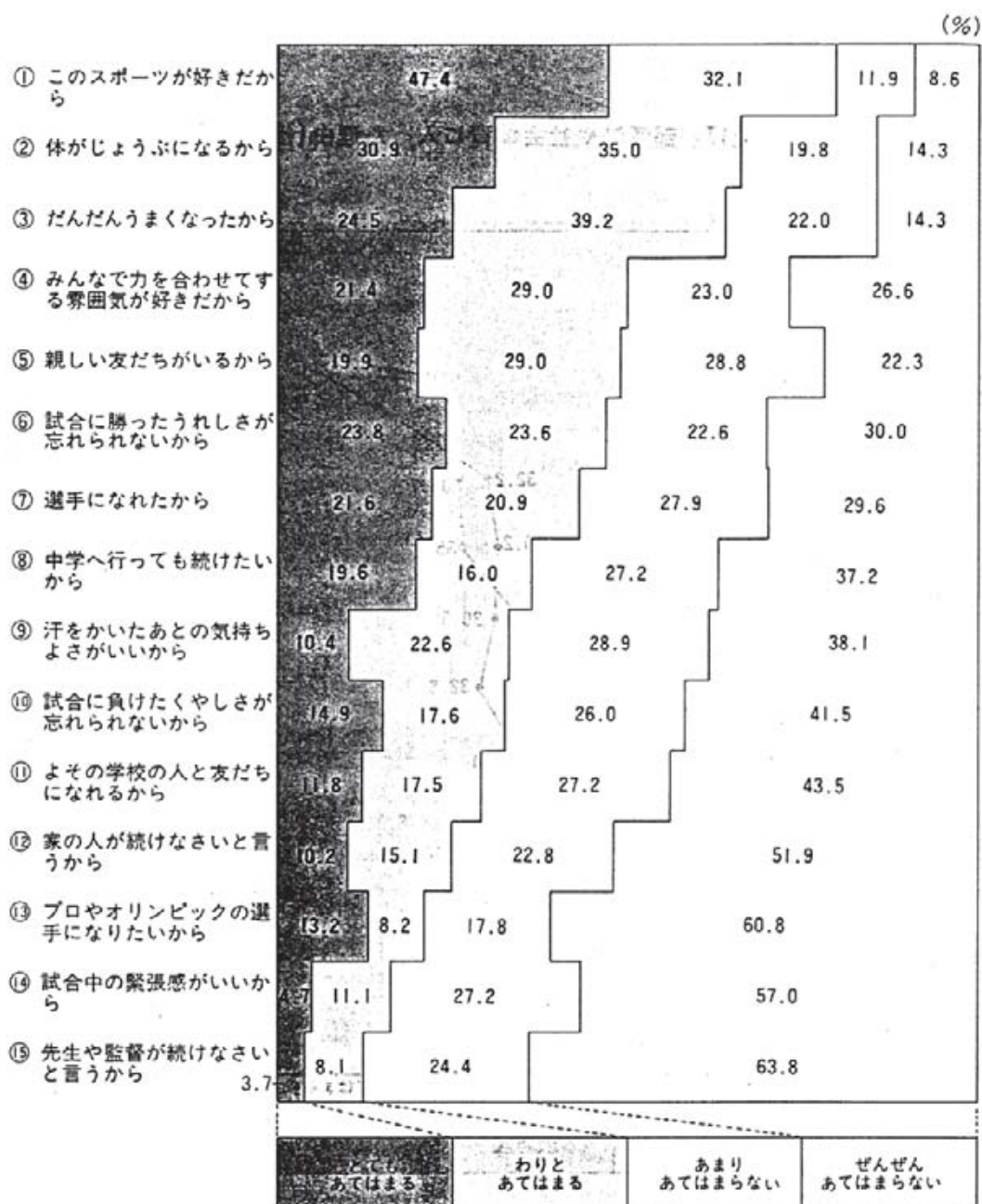
きに『努力志向』の項目が並んでいる。やはり他の活動と違って、スポーツをすることと『努力志向』は、切っても切れない関係にあるのかもしれない。

図17 部活動や社会体育に入った理由(性別)



※数値は「とてもあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えたもの

図18 部活動や社会体育を続けている理由



スポーツは高校くらいまで

子どもたちに、これから先もスポーツを続けていくかどうか予想させてみた(図19)。図からわかるように、年齢を増すごとに、「まったくしなくなるだろう」とする数値が高くなっている。特に「大学や会社の頃」は、「高校の頃」に比べて一気に15%以上数値が高くなるとともに、5割ラインも超えてしまう。子どもたちは、スポーツは高校までと考えているのだろうか。

さらに、その性差をみたものが図20である。図は、「まったくしなくなるだろう」という

数値について、男子と女子を比べている。一見してわかるように、女子のほうが男子よりも高い。しかも「⑥大学や会社の頃」までは、その差が広がっていく。明らかに女子のほうが、そのスポーツを長く続けていく気はないようである。入部の動機のところ(図17)で、男子は「テレビを見て、自分も有名な選手になりたい」と思った数値が高かったが、それがこの男女の差に表れているのかもしれない。

図19 スポーツをこれから先も続けていくか

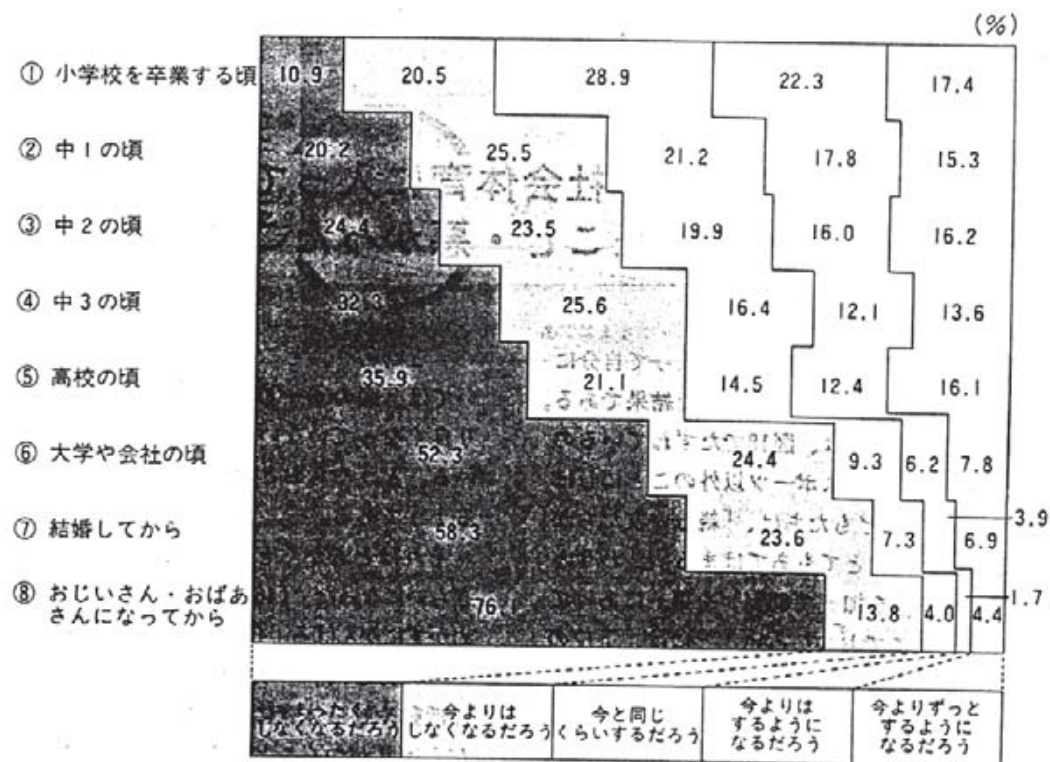
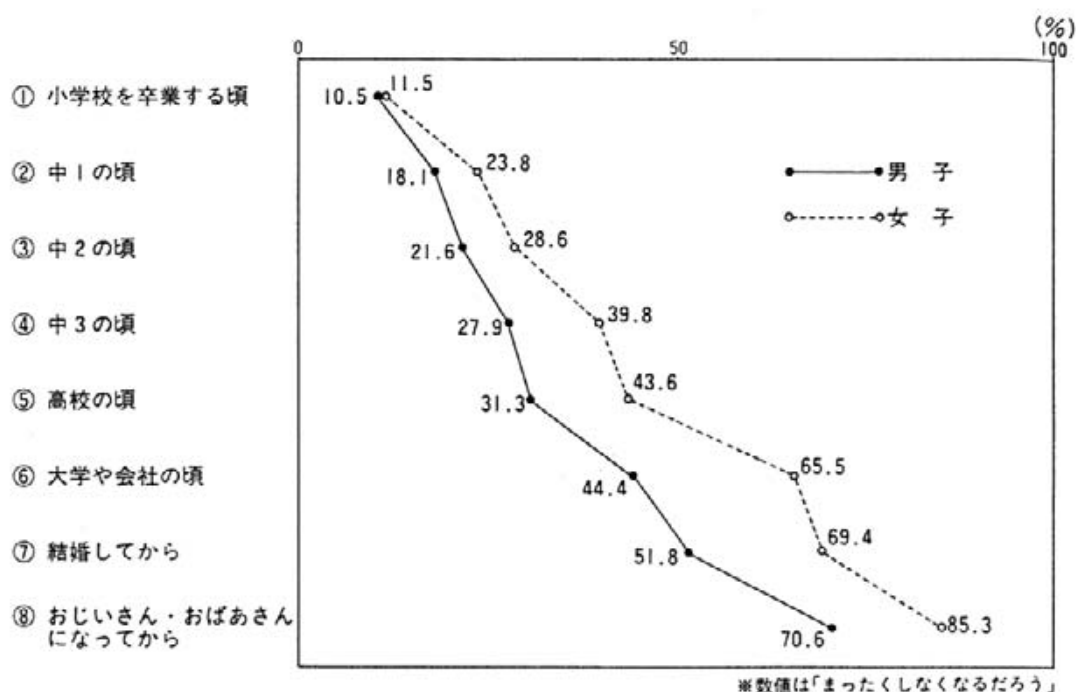


図20 スポーツをこれから先も続けていくか(性別)



部活動・社会体育に入って 良くなったこと・悪かったこと

図21は、部活動・社会体育に入って自分にとって良くなったことをたずねた結果である。スポーツに関しては、図18でたずねているので、この図では、スポーツ以外のことにしほってある。子どもたちは、「親しい友だちができた」こと(「とてもあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えて65%)を第一にあげているが、ここでおもしろいことには、下位の項目である。よくおとなは、子どもにスポーツを勧めるときに、「スポーツをすると集中力や忍耐力がついて勉強もできるようになる」とか、「スポーツをすると積極性が身につく」とか、「スポーツをしている人間は礼儀正し

い」とか言う。ところが、これらの項目については、図の⑥～⑧からわかるように、あまり良くなっていないと子どもたちはとらえている。どうやらおとなの思惑とは、ずれがあるようである。

それはともかくとして、2番目の「負けずぎらいになった」(46%)以下4番目の「手をぬかずにがんばる」(38%)まで、上位の項目に「努力志向」の項目が並んでいることから、部活動や社会体育に入ること、ある程度のがんばりがつくことは確かのようなのである。

図21が部活動・社会体育をすることでの成長感覚、すなわちプラス面のデータとすれば、

図22はそのびったり逆とはいかないものの、マイナス面のデータである。

図全体を眺めると、「ぜんぜんなかった」とする数値がかなりの面積を占めていることがわかる。子どもたちの目を通して見る限りマスコミや世間でいうほど、部活動や社会体育のマイナス面は高くないようである。ただ、

「①練習があって遊べなかった」「②暗くなってから帰った」「③練習がきびしくてやめなくなった」など上位にランクされた項目は、練習に関連した項目ばかりである。前章の図12～15の練習時間と合わせて考えると、やはり練習時間の長さや練習量に問題があることも事実である。

図21 部活動・社会体育に入って良くなったこと

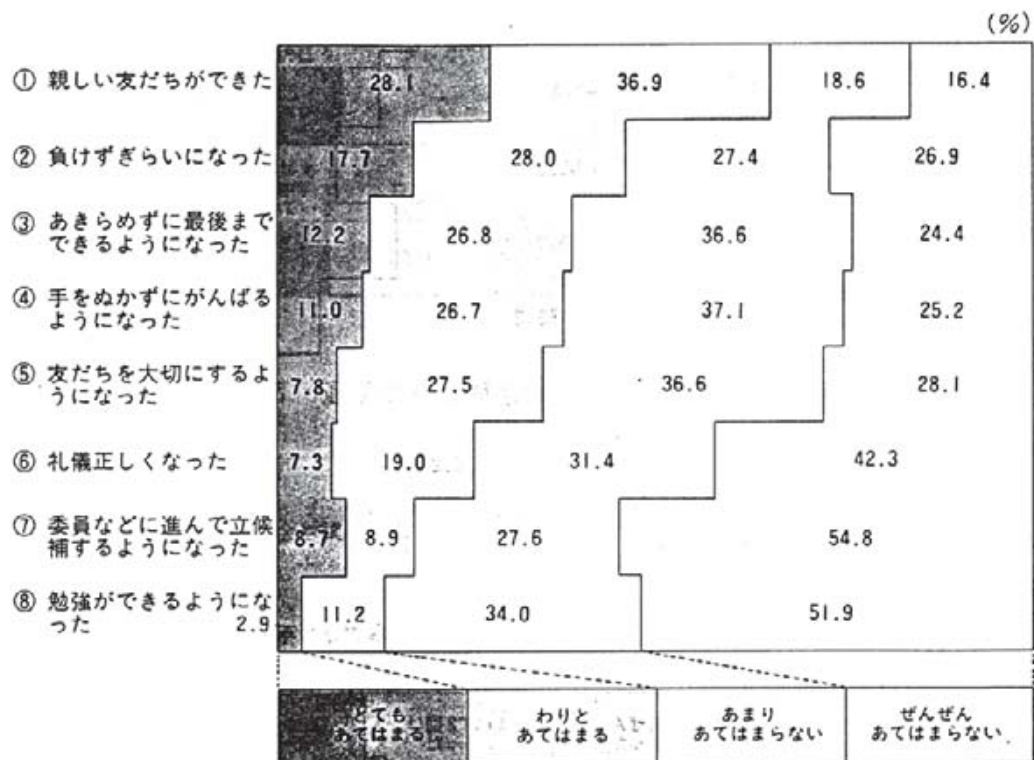
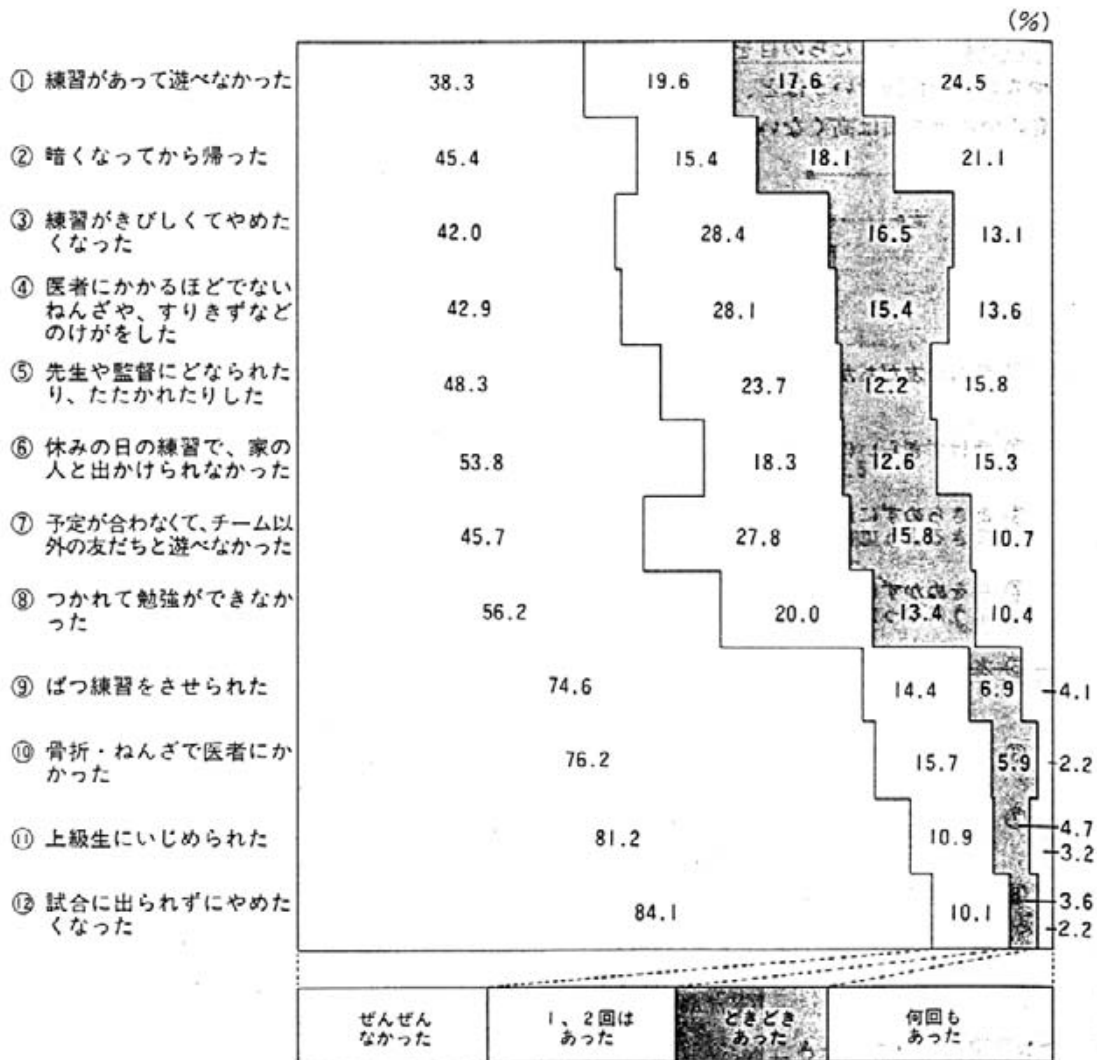


図22 部活動・社会体育に入って悪かったこと



レギュラーの子・補欠の子

この辺で、ちょっと違った視点から部活動・社会体育をみてみよう。

スポーツである以上、多かれ少なかれそこには競争原理が働く。子どもたちにとって、それが最も目にみえる形で表れるのが、レギュラーと補欠であろう。

図23は、選手としての実力の自己評価である。この図23の自己評価を基に、表3の手続きにしたがって、子どもたちを3つのグループに分けた。選手としての実力に対する自己評価が最も高かったグループを、「レギュラー群」と名づけた。次に高かったグループを、「準

レギュラー群」とし、最も低かったグループを「補欠群」とした。なお、この3つのグループを総称して「実力スケール」と呼ぶことにする。

図24は、先の図21の「部活動・社会体育に入って良かったこと」について、「レギュラー群」と「補欠群」の差をみた結果である。図は、差が大きい順に整理してあるが、最も

図23 選手としての実力

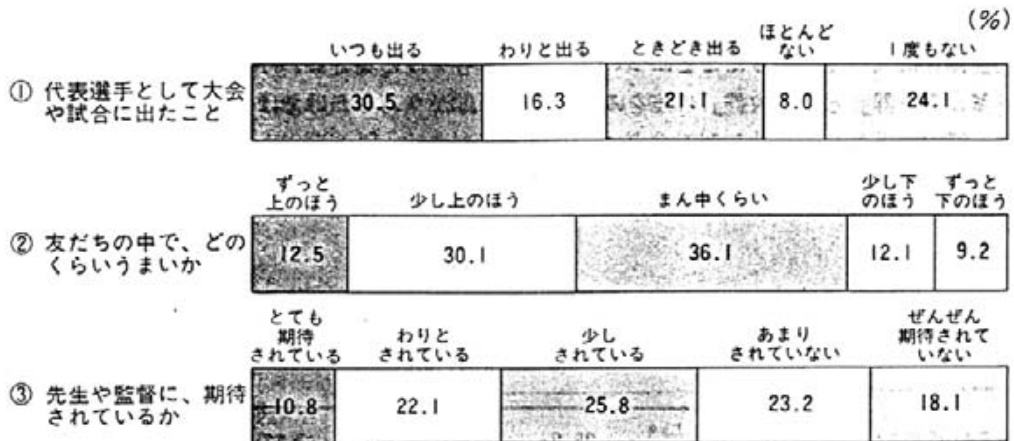


表3 選手としての実力スケール作製方法

① 代表選手として大会や試合に出たことがありますか

② 先生や監督に、選手として期待されていますか

③ いっしょにやっている友だちの中で、どのくらいうまいですか

※①～③の3つの質問について、回答者はスケールの1～5の中からひとつ選んで○をつけてあります。もしAという回答者が上から順に1・3・4と○をつけたとします。ここで、スケールの1に○をつければ1点、以下2に○をつければ2点というようにスケールを点数化(1～5点)しますと、Aは、合計で8点ということになります。こうして、全ての回答者を点数の高い順に上から整理して操作的に下の3つのグループにふりわけます。

補欠群	準レギュラー群	レギュラー群
低得点←		→高得点
全体の 29.4%	40.8%	29.8%

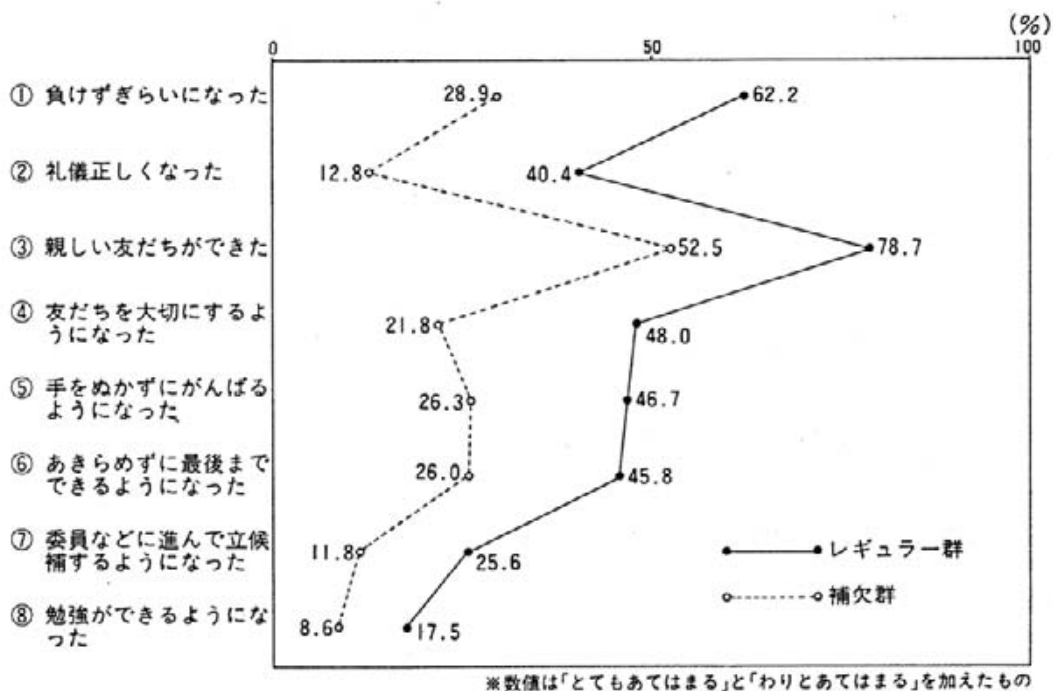
差の大きい「①負けずらいになった」(差が33%)から「⑧勉強ができるようになった」(差が9%)まで、すべて「レギュラー群」の数値のほうが、かなり高くなっている。「補欠群」に比べて「レギュラー群」のほうが、部活動や社会体育に入ったことがプラスに働いているようである。

次にマイナス面は、どうだろうか。部活動や社会体育に入って悪かったことについて、「レギュラー群」と「補欠群」の差をみたものが、図25である。図からわかるように、マイナス面でも「レギュラー群」のほうが上ま

わっている。特に、「①医者にかかるほどでないねんざや、すりきずなどのけがをした」(差が27%)、「②休みの日の練習で、家の人と出かけられなかった」(差が26%)、「③先生や監督にどなられたり、たたかれたりした」(差が23%)の3つの項目は、差が20%以上もある。レギュラーともなると、練習や指導者の接し方もきびしくなるし、それにとまってけがも一段と増えるわけである。決して良いことばかりあるわけではないようだ。

では、「レギュラー群」と「補欠群」では、部活動や社会体育を続けていくことに何らか

図24 部活動・社会体育に入って良くなったこと×実力スケール



の差があるのだろうか。まず、「続けている理由」からその差をみてみよう(図26)。

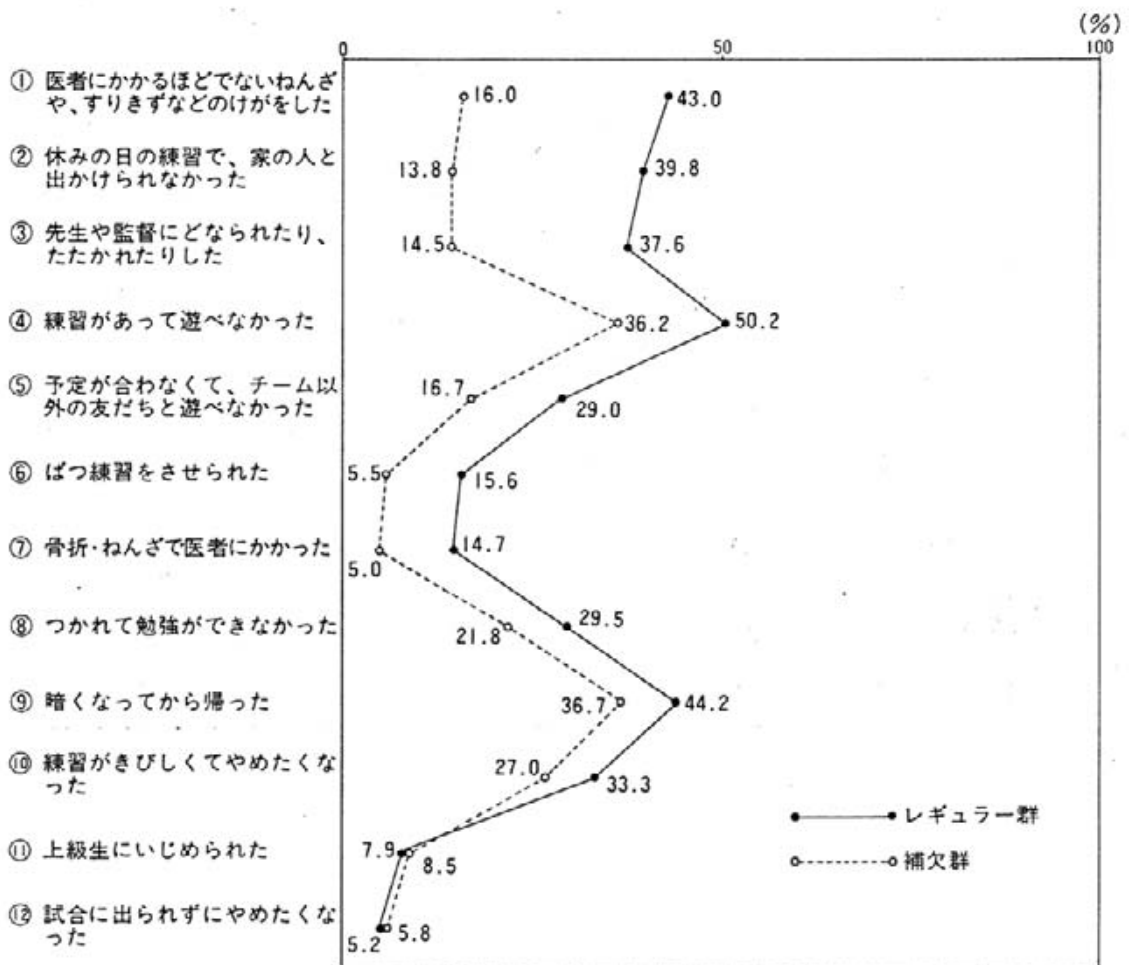
図をみれば、そのほとんどすべての項目で、「レギュラー群」のほうが上まわっていることがわかる。かろうじて、「補欠群」のほうが高くなっている理由は、「⑬家の人が続けないと言われたから」だけである。明らかに、「補欠群」のほうは、この先、部活動や社会体育を続けていくだけの動機も情熱もない。

その結果が、はっきり表れてくるのが図27である。図27は、「これから先スポーツを続けていくか」について、2つの群の差をみたも

のである。なお数値は、「まったくしなくなるだろう」を取り出してある。

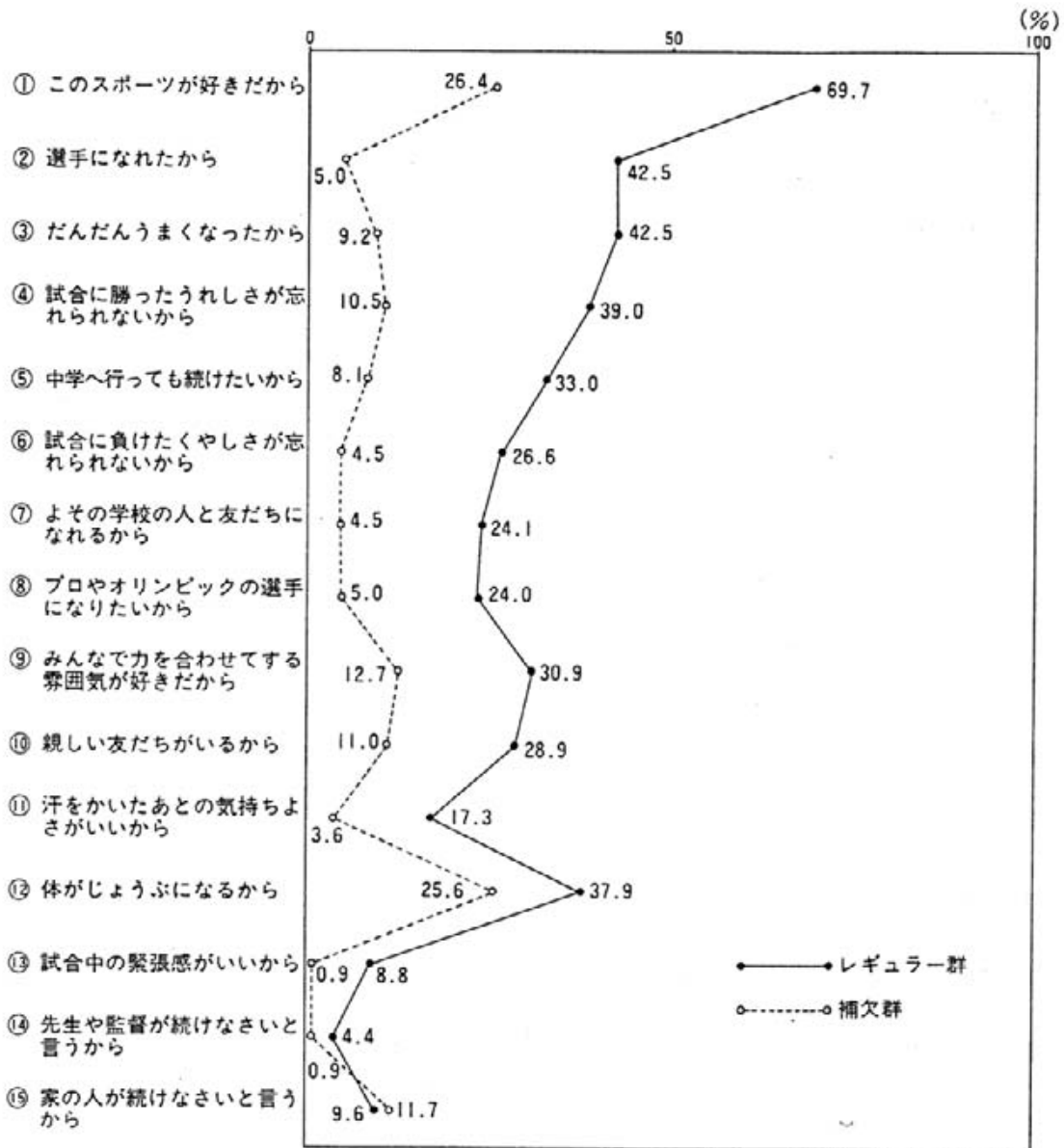
思った通り、「補欠群」のほうが、この先スポーツからより多く、ドロップアウトしていきそうである。とりわけ、「⑥大学や会社の頃」(差が20%)と「⑦結婚してから」(差が21%)では、差が20%とかなりある。どうやら、「補欠群」の子どもたちは、スポーツはいいところ学生時代までと考えている節がみられる。それに対して、「レギュラー群」の子どもたちは、社会に出てもスポーツとつきあっていこうと考えているようである。

図25 部活動・社会体育に入って悪かったこと×実カスケール



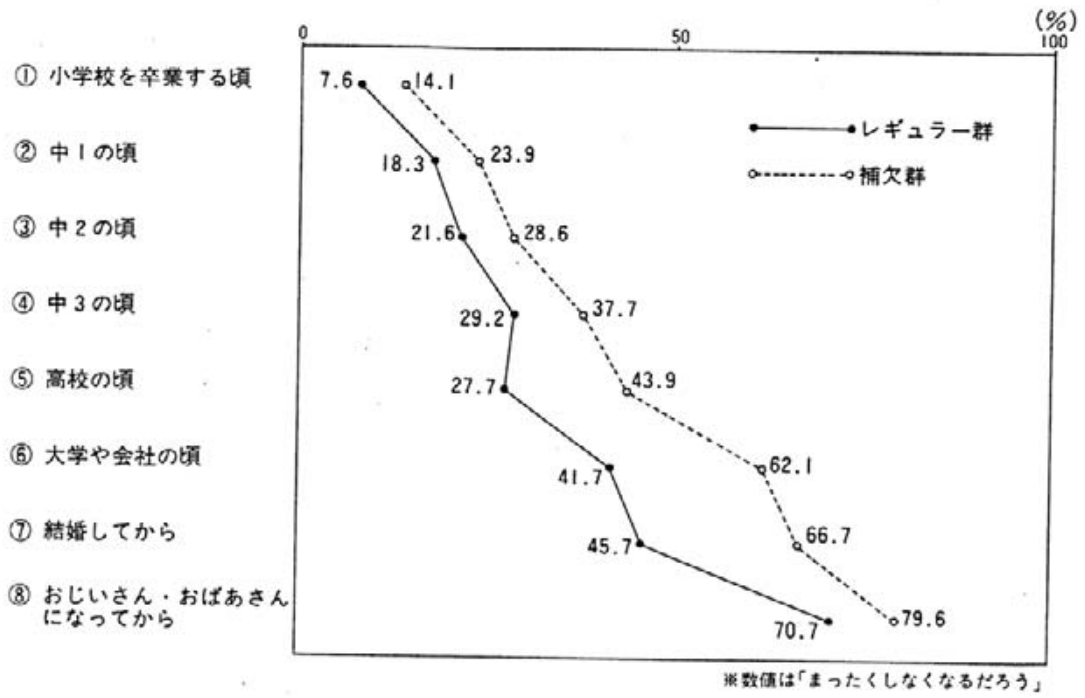
※数値は「何回もあった」と「ときどきあった」を加えたもの

図26 部活動や社会体育を続けている理由×実力スケール



※数値は「とてもあてはまる」

図27 スポーツを続けていくか×実カスケール



3. 部活動や社会体育に入っていない子どもたち



本章では、部活動や社会体育に入っていない子どもに焦点をあてて、なぜ入らないのか、その理由をさぐってみる。合わせて、そういった子どもたちが、部活動や社会体育に入っ

ている子どもをどうみているのかも調べてみたい。なお、本章の調査対象は、部活動や社会体育に入っていない子どもたちである。

めんどくさいから入らない

図28は、部活動や社会体育に入らない理由をたずねた結果である。これといった決定的な理由は見あたらないが、上位には「①遊び時間がなくなるから」（「とてもあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えて39%）「②めんどくさいから」（32%）「③スポーツが苦手だから」（32%）といった項目が並んでいる。これらの項目は、「めんどくさい」という言葉が代表するように、やる気のなさを表している。

勉強や塾、音楽部など他に打ち込めるものがあるから入らないのではないし、家の人に止められているからでもない。何かに挑戦してみようという意欲が感じられないのは、さびしい思いがする。

図29は、その性差をみたものである。「①遊び時間がなくなるから」と「②めんどくさいから」といった理由は、男子のほうがやや高いようである。

図28 部活動や社会体育に入らない理由

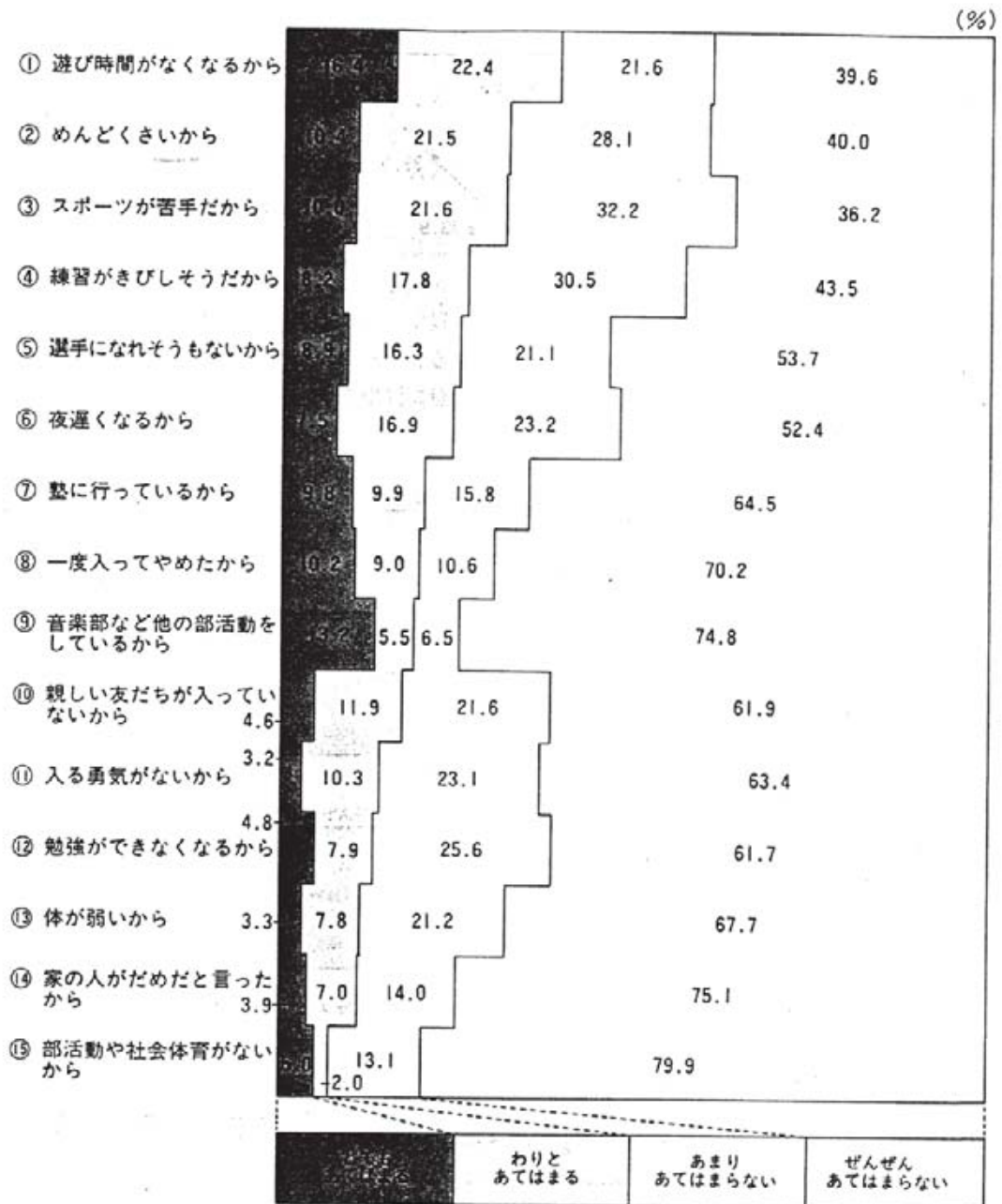
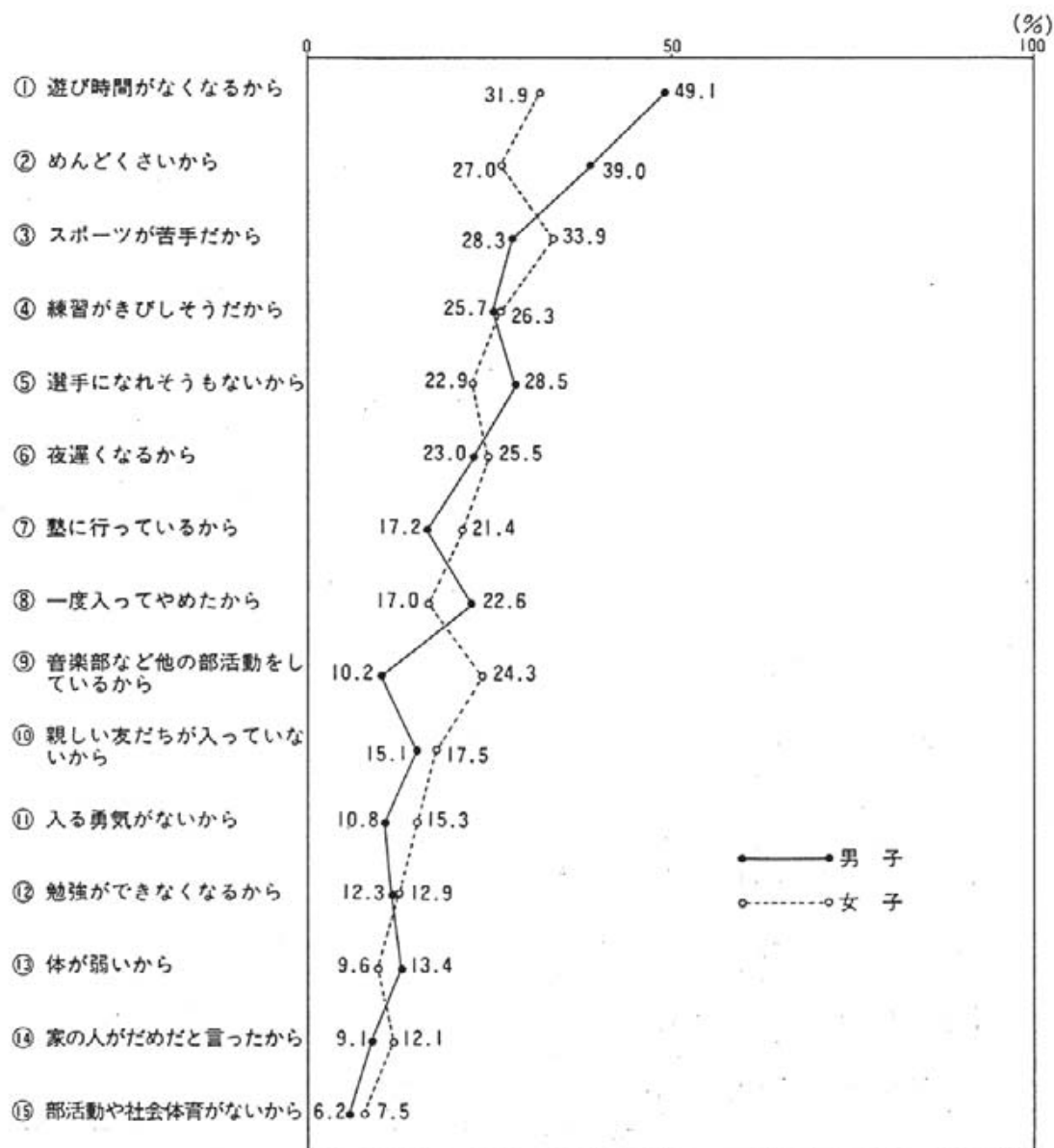


図29 部活動や社会体育に入らない理由(性別)



※数値は「とてもあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えたもの

両親のスポーツぎらいが子どもに影響する

図30は、両親のスポーツ度を表している。一見するとお父さんに比べるとお母さんのほうがスポーツを好まないようである。

さて、この図30をもとに、両親のスポーツスケールをつくってみた。手順は、前の表3（選手としての実力スケール）と同じように行い、子どもたちを両親のスポーツ度で3つのグループに分けた。両親がスポーツ好きの「スポーツ派」と、両親がスポーツ好きではない「非スポーツ派」と、その中間に位置す

るグループの3つのグループである。

図31は、両親が「スポーツ派」と「非スポーツ派」で、部活動や社会体育への参加状況が変わってくるかをみたものである。部活動の場合も、社会体育の場合も、両親が「スポーツ派」のほうが、「入っている」と答えた数値が高くなっている。どうやら、部活動・社会体育に入らない理由のひとつとして、両親のスポーツぎらいが考えられそうである。

図30 両親のスポーツ度

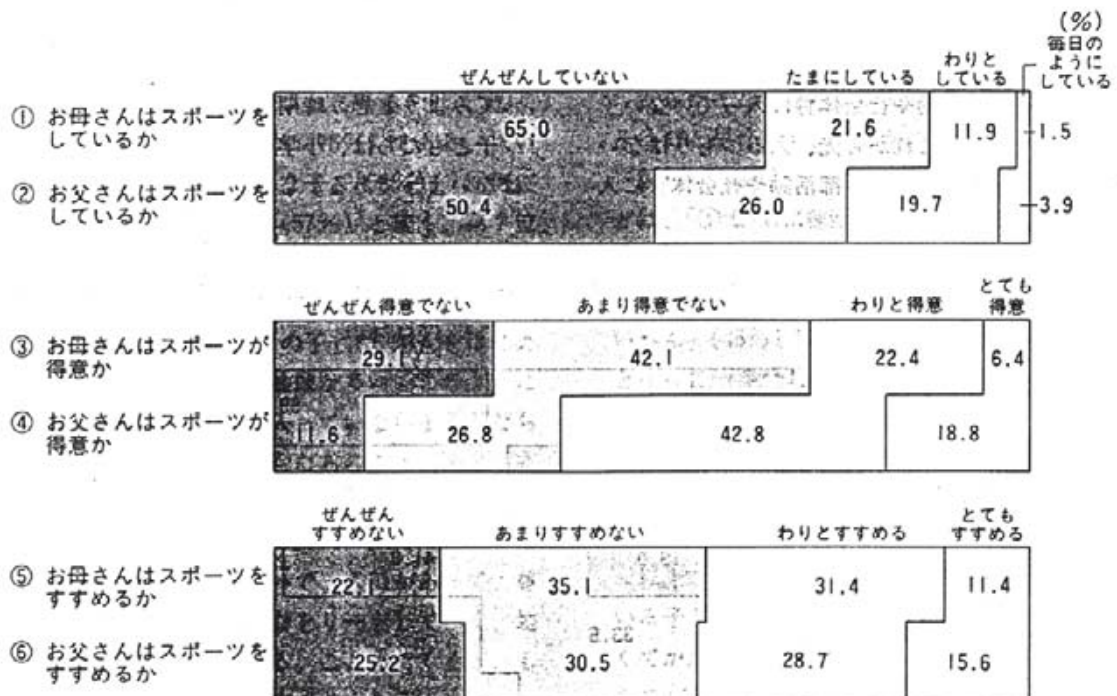
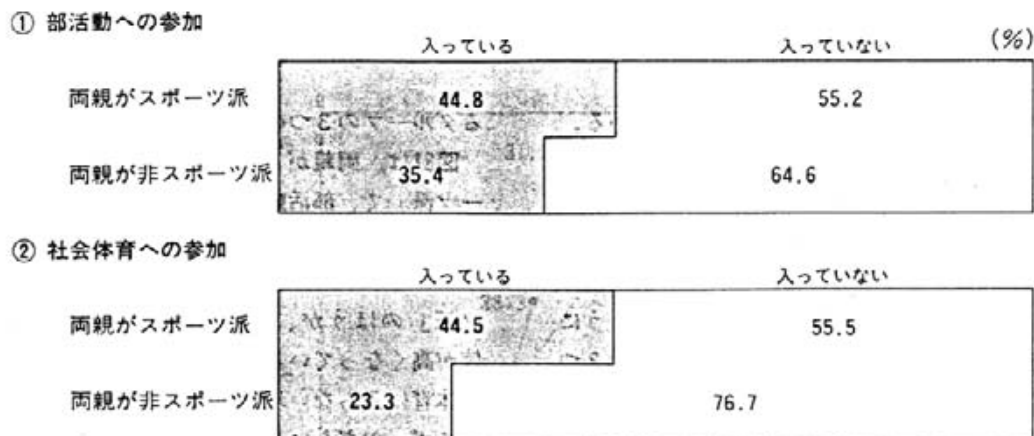


図31 部活動・社会体育への参加×両親のスポーツ度



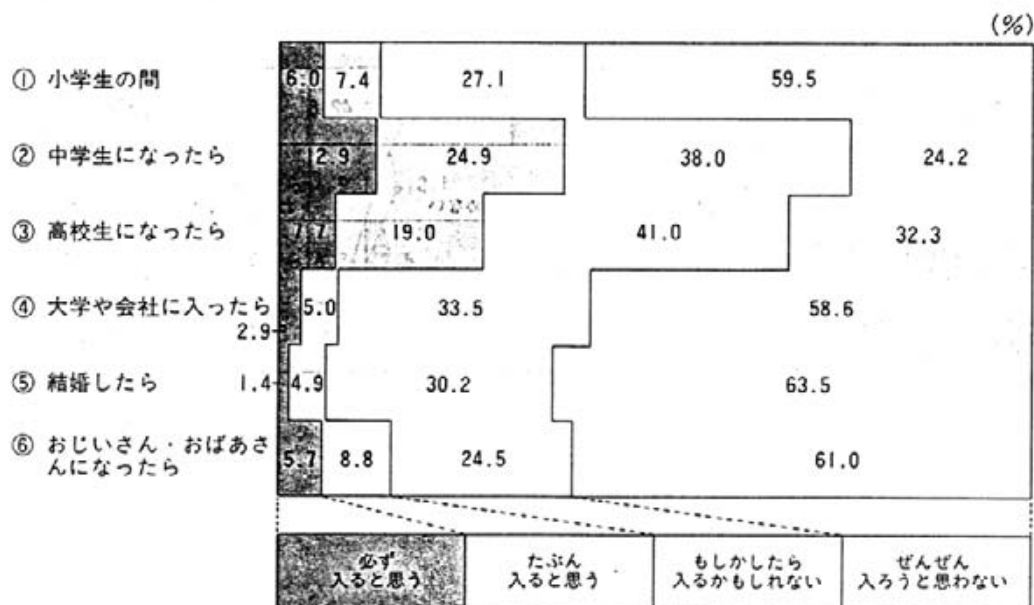
中学生になったら入ってみようかな

現在、部活動や社会体育に入っていない子どもたちは、これから先、入るつもりはないのだろうか。図32で、部活動や社会体育に入

ってみたいと思う時期をたずねてみた。

子どもたちは、小学生の間はあまり入る気はないようである。しかし、中学生になると

図32 部活動・社会体育に入ってみようと思う時期



違ってくる。中学生になったら「必ず入ると思う」、「たぶん入ると思う」と答えている子どもたちは4割近くいる。今はさほどやる気はないけれども、中学生になったらという意気込みだけはあるのであろう。ただ、そうい

った子どもたちが、中学校へ行って部活動に入ってもどれくらい長続きするかは疑問の残るところである。実際に、中学校で初めて部活動に入ったものの、長続きせずにやめてしまった例を何度も聞いたことがある。

部活動・社会体育に入っている子は 大変そうだけれどもうらやましい

部活動や社会体育に入るのはめんどくさいと思っている子どもたちは、入っている子どもたちのことをどう思っているのか、少し気になるところである。まず、入っている子どもたちには、どんな子どもが多いと思っているのか、その人物像からみてみよう(図33)。

図は、「たくさんいる」と「わりといる」を加えた数値の高い順に整理されているが、その第1位にランクされているのは、「①明るくておもしろい子」(75%)である。次いで、「②負けずらいな子」(58%)、「③何ごとにもがんばる子」(57%)と続く。第7位の「勉強ができる子」(42%)まで、すべてプラスの人物像が続く。これに対しては、下位には、「⑩暗い感じの子」(6%)をはじめとしてマイナスの人物像が多い。このように部活動や社会体育に入っていない子どもたちは、入っている子どもたちのことをかなり高く評価していることがわかる。しかも、上位の7つの項目をすべて合わせてみると、「明るくて、負けずらいで、人気があって、尊敬されていて、みんなをリードしていく、勉強のできる子」となる。ここまでくると、もはやヒーロー的な存在でさえある。

それでは、入っている子どもたちのどんなところがうらやましく思えるのかをたずねて

みた(図34)。

図中で最も高い数値を示した項目は、「①一生懸命やれるものがある」の49%(「とても思う」と「わりと思う」を加えた数値)であった。入っていない子どもたちにとって、自分たちにはないものを持っているということが、入っている子どもたちを実際以上に高く評価してしまう原因かもしれない。

うらやましく思う点があれば、逆にかわいそうだと思う点も、どこかにあるだろう。

図35をみると、一番かわいそうだと思うことは、「①土・日に練習する」ことで、「とても思う」と「わりと思う」を合わせると50%を超える。次いで、「②勉強と両立するのがたいへん」(45%)「③遊ぶ時間がない」(40%)となっている。このように1位から3位の項目は、全て練習時間とかかわりをもっている。練習のために、遊びや勉強の時間をとられてしまうことが、何にもましてかわいそうだと思うようである。

以上のように、部活動や社会体育に入っている子どもに対しての見方は、遊び時間がなくてかわいそうだけれども、一生懸命やれるものがあるうらやましいというところになる。

図33 何もしていない子の目から見た、部活動・社会体育に入っている子の人物像

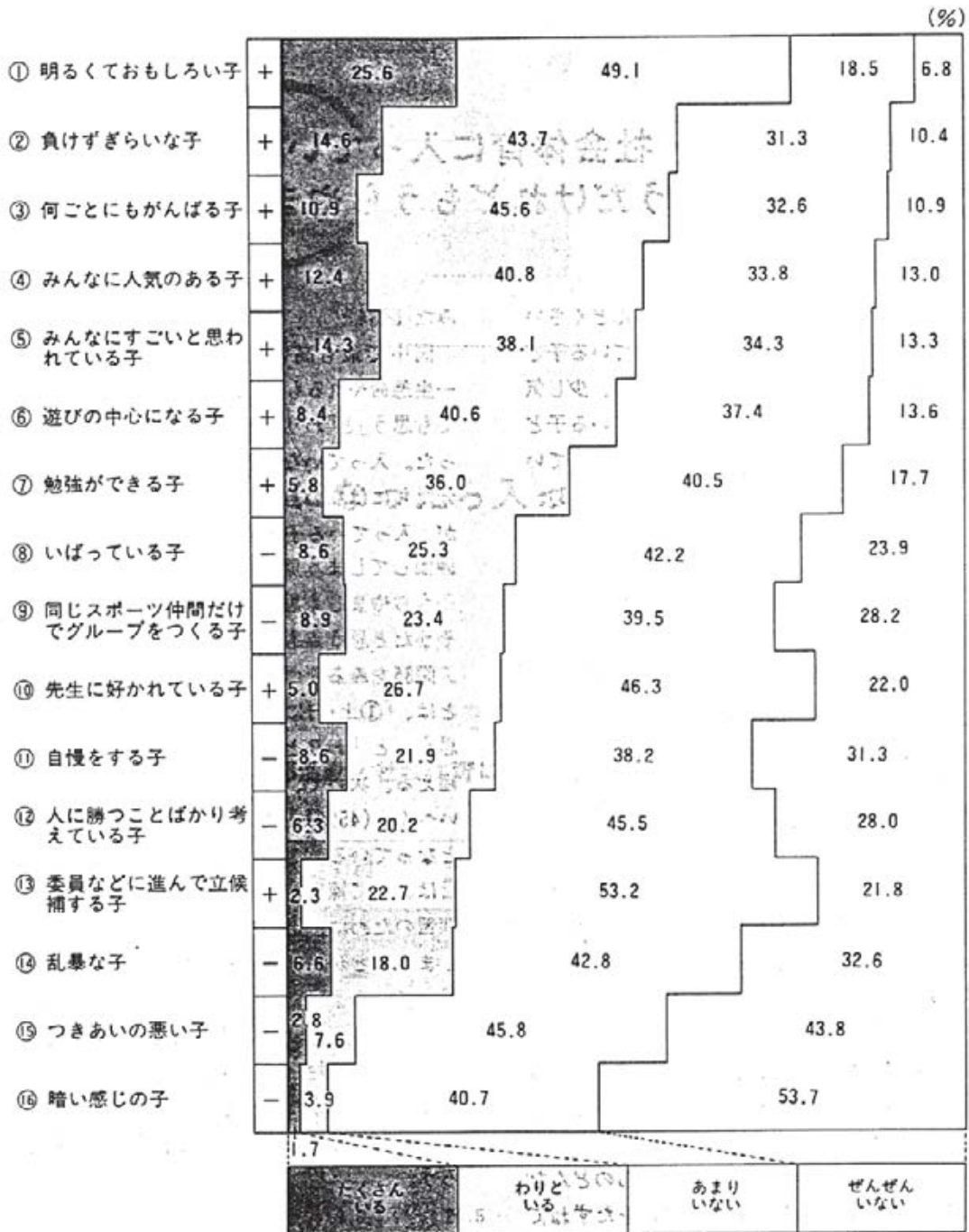


図34 部活動・社会体育に入っている子をうらやましく思うこと

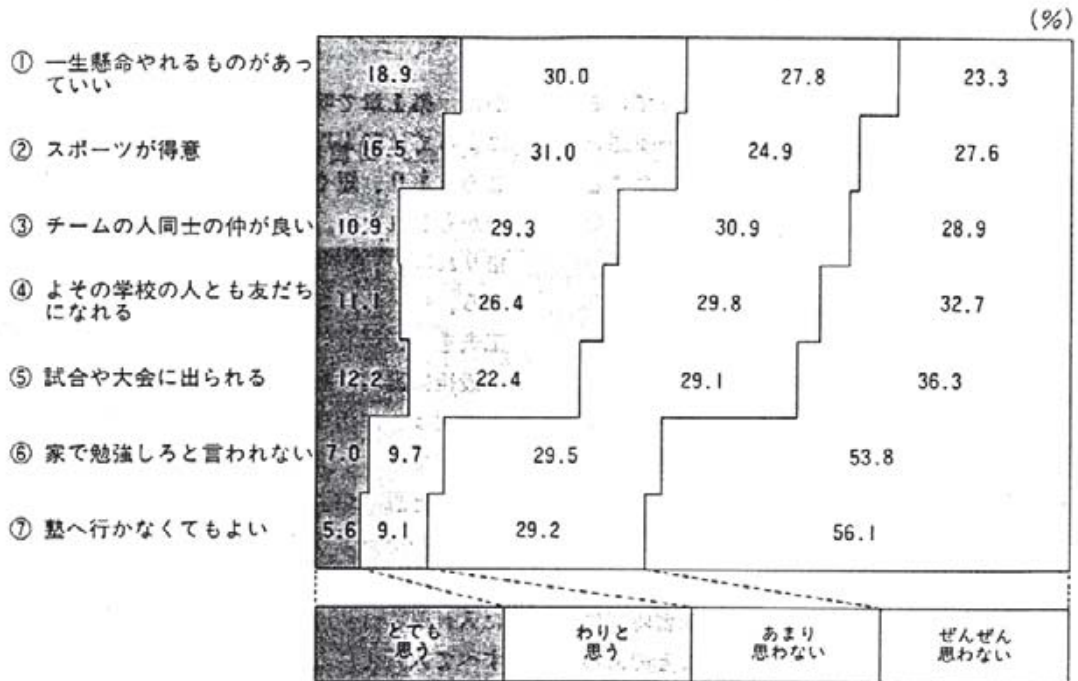
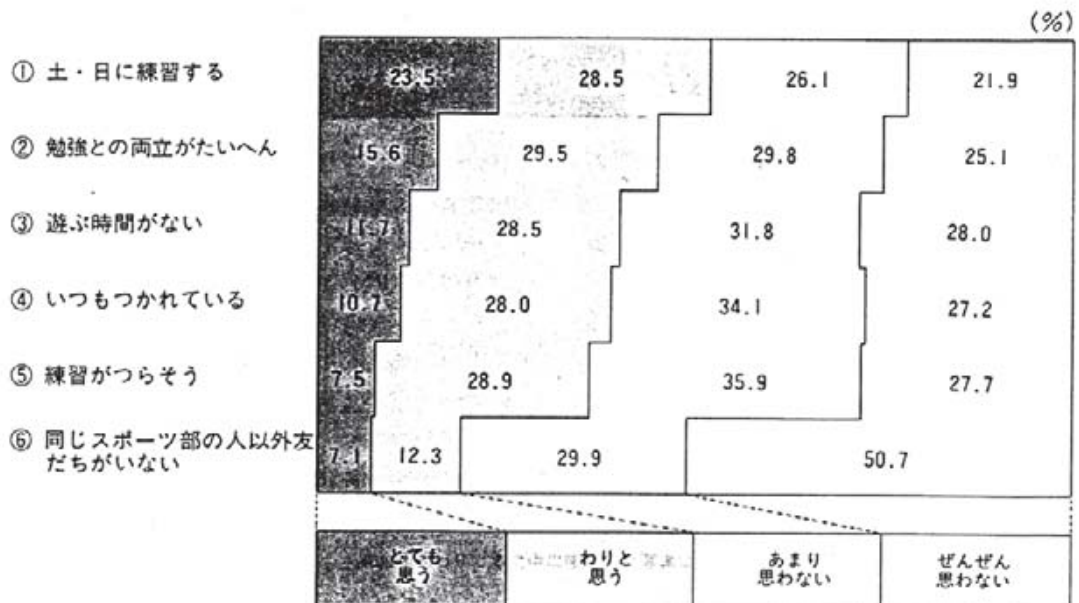


図35 部活動・社会体育に入っている子をかわいそうに思うこと



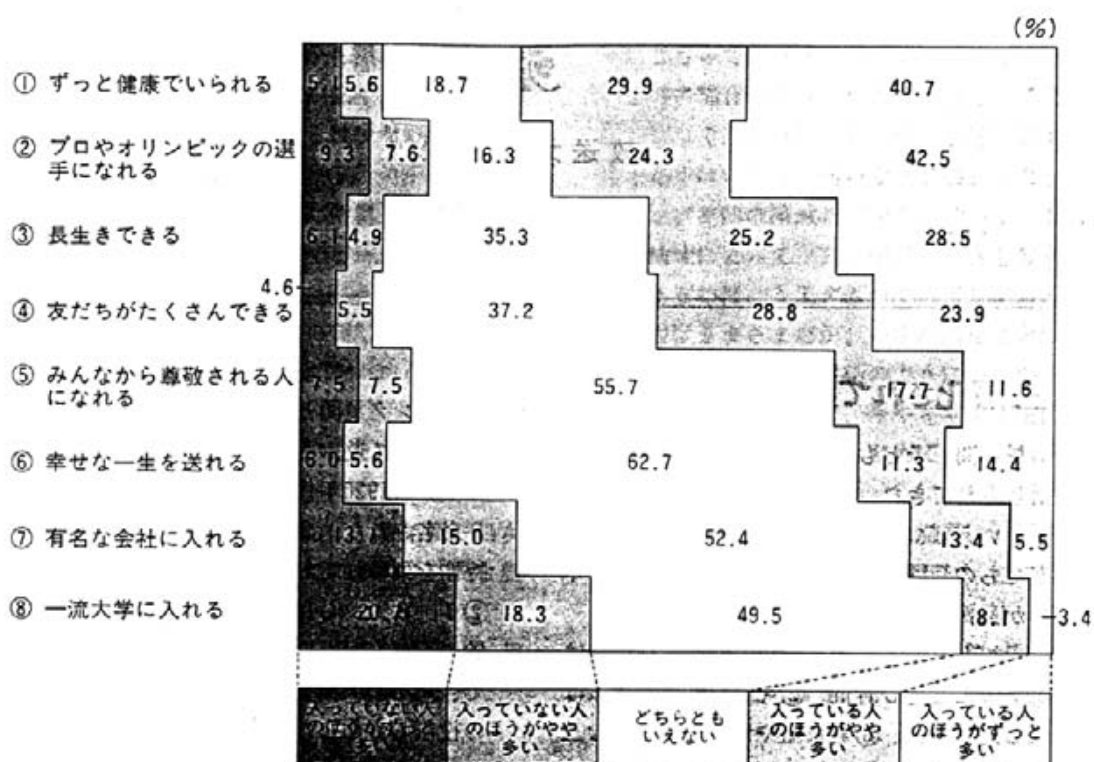
① おわりに

第2章で、部活動や社会体育に入っている子どもたちが、部活動・社会体育の一番悪い点として、練習のために遊べなくなったことをあげている(図22)。第3章で、入っていない子どもたちが、入らない理由として、第一番目に遊び時間がなくなることをあげている(図28)。そして、入っている子どもをかわいそうに思うことにも、練習時間のことをあげている(図35)。こうみえてくると、部活動や社会体育の一番の問題点は、その練習時間であろう。小学生にとって遊び時間は、決して無駄な時間ではない。そのことは、これまでの様々な調査から明らかである。時間に限りがある以上、ある程度の遊び時間が練習時間にとられてしまうのは、仕方がないことであろう。ただ放課後はすべて遊べない、土・日も遊べないでは、問題である。だからといって、部活動や社会体育の活動そのものを否定しているわけではない。短い時間で、効率的に練習してはどうかと提言しているのである。確

かに、第1章で明らかにしたように、クラブによっては50人以上の人数をかかえているところもあり、短く効率的にといても難しいのかもしれない。しかし、徳川家康の言葉を借りれば、「過ぎたるは及ばざるが如し」である。短い時間で効率的にできる指導方法の工夫を、指導者にはぜひお願いしたい。

最後に図36に触れて、まとめに代えたい。この図は、部活動や社会体育に入っている人と入っていない人で、どちらが幸せな人生を送れると思うか、全員にたずねたものである。図からわかるように、入っていない人のほうがまさっているのは、「一流大学や有名企業に入れる」という点だけである。あとの項目は、すべて入っている人のほうが上まわっている。子どもたち自身が自分たちの将来につながる価値を部活動や社会体育の活動の中に見いだしているのである。このあたりに、部活動や社会体育が学習活動と並ぶ教育活動に発展できる可能性を秘めているような気がしてならない。

図36 部活動・社会体育に入っている人と入っていない人はどんな人になれるか



※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。